

バカと女神達による召喚獣

ファニアローゼ@レミアージュ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、明久は道に落ちていた不思議なハードディスクを拾った・・・その夜拾ったハードディスクが気になってしまった明久はハードディスクをゲームにセットした・・・そして明久が気づくとそこは古くから女神達が戦い続けてきたゲームギョウカイだった!そこで明久は大切な物を知り大切な仲間ができたゲームギョウカイだつムギョウカイに来て5年たったある日、明久と女神達がプラネテューヌ集まってゲームをして遊んでいた・・・だが明久達の足元に突如ヒビが入り穴が開いて落ちてしまう!一体明久と女神達はどうか!?

処女作です。おかしなところがあると思いますが、温かく見守ってください!!

あと、オリキャラは今のところ出す予定はありません

目次

プロローグ

プロローグ1 ハードでいきなり空に

!? | 1

プロローグ2 異世界の女神の遊びそ

して帰還 | 5

本編

キャラ設定 ※ネタバレ注意? 訂正

予定 | 10

Fクラスって酷くない? b y 明久

16

なんでさー!?! ※某魔術使い風 | 19

ネプテューヌさんマジ勘弁してください

い b y 明久&ノワール | 28

プリンとプルルンって似てるよね? b

y ファニアちゃん いや、そんな事無

いから!?! b y 明久 | 35

食べ物の怨みは恐ろしいと知れ b y 明

久 その気持ちめっさわかるわ b y

ファニアちゃん | 49

学園長って妖怪らしいよ? b y ファニ

アちゃん いや、失礼過ぎるで

しょっ!?! b y 明久 | 55

ワシらこの小説で結構影薄くないか

のお? b y 秀吉 確かに

b y ムツツリーニ そ、ソナナコト

アリマセンヨ〜? b y ファニアちゃん

62

閑話 いーすん怒りすぎると胃に穴

が空いちやうよ? b y ファニアちゃん

アナタもその原因の一人なんですけ

ど!?! b y いーすん 73

この作品ネプテューヌ要素少ない気が

する!?! b y ファニアちゃん ……:

何を今更 b y 坂本雄二のお嫁さん霧島

翔子 おいこら!! b y 赤ゴリラ

82

ナンテコツタイ\ (^o^)/ b y. 明

久 いや! どうした! 明久!?! b y. 雄

二 明久が壊れた〜!!?! b y. ネプ

テューヌ もうどくにもな〜れ〜♪

b y. ファニアちゃん 90

変身中の攻撃はご法度だよ!!! b y ネ

プテューヌ あ、今回の変身ゼリフ

それじゃないから b y 明久 ネプ!?

b y 再びネプ子 明久そこは黙って上

げなさいよ b y ノワール 102

僕はまだ2段回変身を残しているよ!!

b y 明久 1つは女が m : . ムグツ!?

それ以上は設定読んでない人にバレるか

らアウトだよ!! b y ノワールとその口を

塞いでるネプテューヌ もう遅いと思う

わ
b
y
ブ
ラン



プロローグ

プロローグ1 ハードでいきなり空に!?

コツコツ コツコツ コツコツ

ある日の夜、とある少年が重い足取りで夜の道を歩いていた

？「はあ・・・鉄人め、春休み最終日に観察処分者の仕事を頼むなんて！さらに補習までやらせるなんて・・・」

少年の名前は吉井明久（よしいあきひさ）文月学園の1年生であるそして・・・

明「本当だったら夜遅くまでゲームを消化するはずだったのに！鉄人め僕の有効的な時間の使い方の邪魔するとは、万死に値する!!」

この通りバカなのだ

明「今何かバカにされたような・・・ん？」

その時、明久はなにか光る物を見つけた

明「何あのまるいやつ？」

気になって近付くとそれは、ピンクの悪魔・・・でわなくハードディスクだった

明「何でこんなところにハードディスクが？しかも剥き出しの状態で？うっくん」

明久は数秒考えたが

明「あくもう良いやとりあえず持つてかえつて明日交番に届けよう!!」

直ぐに考えを放棄し早足で家に帰った

・・・帰つてしばらくして明久は積みゲーを幾らか消化したあとあのハードディスクの事を思い出す

明「そういえばこのディスク僕が持つてるゲーム機で起動出来るけど・・・ちよつとだけなら良いよね？」

そんなゲスな事を言い出す明久

明「うん、ちゃんと起動するか確かめるだけだ！確かめたら直ぐ消して明日交番に届けば良いんだ！」

そして明久はディスクをゲーム機にセットして起動した

明「え？ちよつ！眩しっ!？」

しかしディスクがいきなり光りだして、明久を呑み込んでいく！・・・そして光が消えた頃には明久は消えていた・・・

—とある場所の空中—

「? B u . . . 私も」

分かりました! 分かりましたから!?! ちゃんと出しますから!!

プロローグ2 異世界の女神の遊びそして帰還

ある日の朝？明久は寝ていた。そして声が聞こえた

——お．．．く．．．い．．．あ．．．——

明（ん？なに？）

——おき．．．さい．．．あ．．．さん——

明（うるさいなく静かに寝させて〜）

——起きてくださいーい！！明久さーーん—— キーン

明「ひぎやー!!」ズルツ

明久はベッドから落ちた ドガツ

明「ひでぶっ!!」

？「やつと起きましたか明久さん！」

明久が顔を上げると妖精サイズの小さな少女がいた

明「もう少し静かに起こしてくれてもいいじゃん”いーすん”」

彼女の名前は秘書イストワールあだ名はいーすんと呼ばれていて親しまれている

イ「わたしはイストワールと呼んでほしいですけどね」

明「ちよつ！サラツと地の文を読まないで！・・・で、どうしたの？」

イ「あ、そうでした！ネプテューヌさんが『リビングに来て！』だそうです」

明「ああ、そういうこと・・・じゃあ行ってくる」

イ「明久さんリビングに行ったらネプテューヌさんに『わたしは少し出かけるので用事が終わったらしつかりと女神の仕事をしてください、帰ったらチェックしちゃうからね！』と伝えてください」

明「わかったよ」

イ「言っておきますけどこれは明久さんにも言っているんですよ！明久さんはフリーであつても女神なんです。ネプテューヌさんの仕事の資料と一緒に明久さんの分も置いてありますからやっていて下さい！いいですね!!」

明「・・・はい」

明久はうなずくしかなかった

——リビング——

リビングについた明久はソファアに身を沈めていた紫髪のパーカーを着た少女ネプテューヌを見つけた

明「ネプテューヌ来たよー」

ネ「来た来たー明久ーこっちだよー」

? 「やつと来たわね」

聞きなれた声が聞こえた

明「あれ? ノワール達来てたの?」

そこにはネプテユーン以外の3人の少女達がいた

ノ「ええ、私達もネプテユーンに呼ばれたのよ」

彼女の名はノワール、いつもツンツンしていて真面目な性格

ベ「わたくしもノワールと同じですわ」

彼女はベール、おっとりとした性格の女性（隠れゲーマー）

ブ「・・・わたしはプラネテユーンのあるイベントの帰りに無理やりネプテユーン連

れてこられたから」

彼女はブラン、静かなところで本を読むのが趣味

明「それでネプテユーンはなんで僕たちを呼んだの?」

ネ「ふふふ、実はみんなでたまには遊ぼうかなって呼んじやった♪」

ネプテユーンの言葉にノワールが吠えた

ノ「ちよつと! そんなことの為にわたし達を呼んだわけ!?!」

ノワールが怒っているのと対照的にベールとブランは落ち着いていた

ベ「まあまあノワール落ち着いて」

ブ「落ち着け」

ノ「ちよつと！あなたたちは何とも思わないわけ!?」

ベ「わたしは最近仕事が忙しいのでこのような機会、逃しませんわ」

ブ「わたしもベールと大体同じ理由」

彼女達にも仕事？は有る

ノ「なっ?!あなた達それでも女神なわけ!?」

そう、彼女達は女神なのである

そしてノワールの叫びにネプテューヌはさらに追い討ちを掛ける

ネ「もうそんなんだからノワールは友達がいらないんだよ?」

ノ「友達ぐらいいるわよ!!」

明「と、とりあえず遊ぼうよ!」

その後いろいろありはしたが無事にゲーム等遊んだりしていた・・・

しかしそれは突然起こってしまった

——パリンツ——

明久達がゲームをしている時、明久はなにかが割れるような音が下から響いた

明「え?」

しかしきずいた時には遅かった

明久達の下には裂け目が発生していきずいた時には明久達は落ちてしまっていた……

——
???

明「ん〜？」

ネ「あ、起きた明久？」

明「ここ……わ」

明久は周りを見渡しある事にきずいた

ネ「どうしたの？明久？」

明「此処は僕の家だ」

本編

キヤラ設定 ※ネタバレ注意? 訂正予定

吉井明久

在籍：Fクラス（熱で倒れた姫路を助けたから）

成績：Aクラス上位（場合によっては主席を狙えるかも?）

腕輪：女神化、ソニックフォーム、???

女神化は召喚獣の見た目が女神化状態になり召喚者の口調までも女神化状態になってしまう、そして女神化状態での腕輪の能力もある。ソニックフォームはまんま『魔法少女リリカルなのは』の『フェイト・T・ハラオウン』の技であるゲームギョウ界に落ちる前の世界で明久が『リリなの』でフェイトのソニックフォームが格好いと思つて2年の間に頑張つて習得した。メリットは速さが3倍になる（ムツツリーニの加速より少し速い）デメリットは防御が3分の1になってしまう。*ムツツリーニの加速は2.5倍の速さという設定

女神化状態での腕輪：真ソニックフォーム、魔法弾放射、サイレント・ストライク
真ソニックフォームはソニックフォームの強化版で『リリなの』でもフェイトが使う。

これも速さが上がり5倍になり（ムツツリーニの加速よりかなり速い）防御も5分の1になる。

容姿（女神化前）：原作よりも女の子の様な見た目で普段はネプギアと作った認識障害の髪留め（ネプテューヌと同じ髪留めの形）見た目も男に見える様になっている、女神化した後にこのような見た目になった。ショートカットじゃないと男と気づかれな
い。

容姿（女神化状態）：銀髪で毛先が黒色のサイドテールで紫目の美少女、女神化前の容姿よりも更に可愛い為女神達の中ではマスコットの存在

性格：女神化前は原作通りしかし怒ったら口調が変わり変身後は霧島翔子のようなしゃべり方で怒ったら凄く怖い

趣味：料理（特にお菓子作り）、機械の改造、ゲーム
設定

ある日、道端に落ちていたハードを起動しゲームギョウ界に落ちてしまった明久その後なんやかんやあり洞窟でネプテューヌが女神化し敵を倒したがもう一匹出てきてピョンチになったところに明久はイストワールと名乗る者に女神パレットを受け取り女神サモンズハートとなった。その後、明久は強大な敵に挑んだりみんなと平和な日々を過ごしたりしている。よくネプテューヌの妹のネプギアと機械を弄ったりしてそれが

暴走してイストワールによく起こられたり、一様明久も女神なので仕事もイストワールから任されるがよくネプテューヌと逃げています。それこそ女神化してでも逃げたりする。コンパと一緒によくお菓子作りをしている。

因みに明久の服装はネプギアと似たような服装になってるデス！

ネプテューヌ

在籍…Fクラス（学園長により他より人数が少なかったFクラスに）

成績…Aクラス上位

腕輪…女神化

容姿・性格…原作通り

趣味…ゲーム、明久弄り

設定

原作とほぼ変わりなし（次のキャラから表示しません）

ノワール

在籍…Fクラス（ネプテューヌと同じ理由）

成績…Aクラス次席並み

腕輪…女神化

容姿、性格…原作通り

趣味…コスプレ

ベール

在籍…Aクラス（ネプテューヌたちとは逆でAクラスの人数が足りなかったから）

成績…Aクラス上位（なるおと思えば主席になれる）

腕輪…女神化

容姿、性格…原作通り

趣味…ネトゲや積みゲーの消費

ブラン

在籍…Aクラス（ベールと同じ理由）

成績…Aクラス上位（ベールと同じく次席を狙える）

腕輪…女神化

容姿、性格…原作通り

趣味…小説を書いたり読む事

バカテス勢はほぼ原作通り

魔改造組

木下優子

在籍…Aクラス

成績：Aクラス上位（ルールに勉強を教えて貰って久保君とほぼ同等の点数を総合で取れるようになった）

腕輪：黒化 もといオルタ化

容姿：性格や容姿は原作通りだが、腕輪で黒化するとFGOのジャンヌ・オルタの容姿になる。

趣味：本を読むこと（何の本は… 察してあげてください） 察しって何よ!? b.y.

優子

設定

主人公の明久以外の改造キャラ、ルールによって点数が久保君並になり、腕輪がキチガイになってしまった人、もはや黒化したらプライドの高いDSに成り下がるというね、まあ、ノワールと闘わせたら結構気が合うんじゃないかと思いましたが!!あの人もプライド高いし… ぼっちだし 誰がぼっちよ!! b.y. ノワール あと、腕輪発動のコストが低いと思った人もいるかもしれませんが、あれは使用デス!!腕輪の焰とか剣とか出す場合に点数がその出す量によって減っていき、（吼えたてよ、我が噴怒（ラ・グロンドメイト・デュ・ヘイン）は約200点ぐらい削れてしまうからデス!… ノワール達の女神化の飛行も徐々に点数が削れる。エグゼドライブもそれなりに削れてしまふ。しかし1回戦は最後の1撃で点数をほぼ全部使うつもりで放ったが点数不足で、そ

れなりに威力は下がっている。なのでお互いの技は約40点で発動している。

Fクラスって酷くない？ by 明久

ある朝、その日は通学路に桜が咲き誇りそれこそ止まっても見ていたいほど美しい桜だ：しかし

明「チツクシヨオオオオ!!」

少年、吉井明久は止まる余裕が無いかのように叫びながら走っていた

明「なんでこんな時に目覚まし時計電池が無いのー!?!」

彼は如何やら目覚まし時計の電池が切れて遅刻しそうとしている：しかしそれはゲイムギョウ界に行く前から切れていたのだ。……本当にバカだな

明「ちよつと！ファニア!!誰がバカだー!?!」

ちよつ!?!説明に反応しないでください!!つーか早く学校行かなくても良い訳!!

明「そうだった！うおおおお!!」

はあ

明久 side

校門前

? 「遅いぞ吉井!」

明 「あつ! おはようございます。鉄 z : 西村鉄人!」

校門前に居たのは1年生の時に世話になった西村先生だ

鉄 「今言い治したつもりかも知れんが治って治って無いぞ、あと西村鉄人とはなんだそれと先生を付けろ!!」

明 「すみません。鉄人西村先生!」

彼の趣味はトライアスロンでその事から「鉄人」と皆から呼ばれている

鉄 「鉄人と西村を入れ替えろと言った訳では無い!! : はあ、まあ良いコレがお前のクラス表だ」

そう言つて封筒を渡してきた

明 「ありがとうございます。 : と言つてもFクラスですよね?」

鉄 「ああ、すまない学園長に問い合わせさせて再度試験を受けれる様に頼んだが無理だった」

明 「いえ、構いませんよどうせFクラスだったでしょうし」

鉄 「そうか : しかし本当にすまなかつた」

明 「だから良いですつて、とりあえずクラスに行きますので!」

鉄 「あ、ああ行つてこい!!」

Fクラス前

明「うわあ、何コレ？」

Fクラス前に着くとそこは凄かった。此処に来る前に見てきたAクラスも凄かったがFクラスも凄かった。窓から見たが壁からキノコが生えていたり見るからに腐っている畳、割れている窓、卓袱台などと酷い設備だ。

明「取り敢えず中に入ろう…よしっ！」ガラッ

勇気を出して教室に入ると…

明「すみません！遅r「遅いぞ！このウジ虫野郎!!」した…ってイキナリ罵倒!？」

そこには赤ゴリラが「誰が赤ゴリラだ!!」立っていた

明「地の文に反応しないでよ、それで何やってんの雄二？」

と、私の説明に反応した明久君が申しております。byファニアちゃん

うっさいわい、後、彼は坂本雄二僕の悪友だ

雄「ん？ああ、俺がこのクラスの代表だからな前に立ってクラスの奴らを見ていた」

明「へえ、雄二が代表なんだ」

僕が返答すると後ろから声をかけられた…

なんでさー!?!※某魔術使い風

? 「あのく退いてもらえますか？」

急に後ろから声が聞こえ僕が振り向くとそこには男性が立っていた

明 「あつはいすみません」

? 「とりあえず席に着いて下さい」

明 「分かりました」

雄 「うくつす」

明 「あつ雄二僕の席つて何処か分かる？」

雄 「席なら決まつて無いから好きに座れ」

席すら決まつて無いの！

そして男性が教卓に立ち話し始める

? 「えくこのクラスの担当となつた福原慎ですよろしくお願ひします。」

先生は黒板の方に向くと何かを探して諦めたように此方に向いた

福 「えく皆さん卓袱台と座布団は支給されていますか?何か問題があれば申して下さい」

い

明「ねえ、雄二もしかして…」

雄「ああ、さつき教卓に立っていた時に見たがチヨークは無かった」

チヨークまで無いとかどうなってるのこのクラス

「先生、窓が割れて風が寒いんですけど！」

福「我慢してください」

「せんせー、座布団の綿が無くて尻が痛いです！」

福「我慢してください」

「センセ、卓袱台の脚が折れてます！」

福「我慢して下さいs「出来るかー!!」冗談です。後でコレを使って下さい」

そう言つて先生は教卓に木工用ボンドを置いた

にしても酷すぎるまるで廃墟の様な所だ

福「それでも、自己紹介をして下さい、廊下側の人からお願ひします。」

その先生の言葉に廊下側の席の人が立った…つと、いきなり知つてる可愛い子だ…しかし

秀「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。後、儂は男（・）じゃからな！これからもよろしく願ひするぞい」

そう彼は男である僕と同じ男の娘だ…まあ、僕は髪に付けている髪飾りのお陰で見た

目はゲームギョウ界に行く前と同じに見えるのだけどね？

「美少女キター!!」

「うおおおおお!!」

秀 「じゃから儂は男じゃと…」

「男な筈がない!もしそうだとしても女じゃ無いとも言っていない!つまり第三の性別『秀吉』と言うことか!!」

「お前頭いいな!!」

秀 「じゃから…もう良いわ」

…ドンマイ秀吉

康 「…土屋康太」

おっ!如何やらまた知り合いの様だ

康 「趣味は盗t y…何にも無い、特技は盗s、写真撮影」

こいつは、何というか…まあ、特殊だうん、あと誰かツツコミ入れようよ!?!…僕にも
言えるけど

? 「…です。ドイツから一年の頃に引っ越して来ました。」

ん?聞いた事ある声だ

? 「趣味は…吉井明久を殴る事です!」

明「誰だ！そんなピンポイントな趣味をしている人は!？」
そう言つて僕は声のした方に向くと：

島「ハロハロ♪吉井、今年もよろしく♪」

そんな陽気な挨拶をして来たのは去年同じクラスだった友だちの島田美波さんだ

明「何だ島田さんか、うん、よろしく」

それから自己紹介は続き：

「…だ。」

おつ、如何やら次は僕の番だ

明「吉井明久です！趣味はお菓子作りに機械弄りです！よろしくお願いします。なんなら『ダーリン』と呼んでも良いですよ!!」

ちよつとふざけてみた

「『ダイーリィィィィィン』」

明「うえ、すみません忘れて下さい」

なんというか破壊力だ…ふざけるんじゃないかった

そして自己紹介も終盤になり

「…ですよろしくおねg…」ガラッ！「すみません！遅れました!!」

雄「ほお」

雄二以外の最後の人の自己紹介の時にいきなりドアが開いてとある少女が入ってきた：最後の奴は乙

福「姫路さん来ましたか。自己紹介をお願いします。」

姫「はっはい！姫路瑞希ですよろしくお願いします。」

彼女は姫路瑞希さん小学校が一緒だったが今は特に関係がある訳では無い：強いて言えば振り分け試験にとある事があつた位だ

「あの、姫路さんに質問です。」

姫「あ、は、はい！何でしょうか？」

突如男子生徒が姫路さんに質問した

「なんで姫路さんがFクラスに入るんですか？」

姫「えっと、振り分け試験の時に熱が出てしまって」

そう彼女は振り分け試験の時に熱が出て倒れてしまってFクラスになってしまった
「そういえば俺も熱（化学の問題）が出てしまってFクラスに」

「ああ、確かにアレは難しかった」

「俺は弟が交通事故に遭ってそれどころじゃ…」

「黙れ一人っ子」

「ふっ、俺はマイブラザー達をほって置いて彼女と深夜デートを…」

「何処ぞの六つ子の厨二病のマネしてんじゃねえこのカス！あと、今世紀最大の嘘ありがとう!!」

本当にバカばかりだ

福「では、姫路さん空いてる席へ」

姫「はい！」

そう言つて僕の後ろの席に座つた

雄「まさか姫路がFクラスとはな、俺は代表の坂本雄二だよろしくな」

姫「あ、はいよろしくお願いします。」

雄二と姫路さんが自己紹介してるし僕も一樣しておくか

明「姫路s…」

雄二「ああ、何か有つたら頼つてくれ」

姫「はい！分かりました」

くつ、こいつワザ わざとだな！

雄「ところで体調は大丈夫なのか？」

明「あつ、それは僕も気になる」

姫「よ、吉井君!？」

なんか驚かれた

雄「すまんな明久の顔があまりにもブサイクで」

明「待って雄二、なんで雄二が謝っているのさ、あと僕はブサイクじゃない!!」

姫「そ、そんなこと有りません!吉井君は顔も整っていますし…」

ありがとう姫路さんフォローしてくれて

雄「うむ、言われて見れば悪く無いかもな…そういうえば明久の事が気になっている奴がいたな」

明「え?それつて…」

姫「それって誰ですか!!?」

また遮られた(, . . × . .)

雄「確か久保…」

久保さん?誰だろ?

雄「利光だったか?」

明「男じゃん!えっ、冗談だよね?冗談だよね雄二?」

あと、姫路さんはなんで胸を撫で下ろしているのさ!!

雄「ああ、半分冗談だ」

明「ちよつと待って!半分て何!?!ねえ、もう半分はなんなのねえ!雄二!?!」

福「はい、そこ静かにして下さい」

バンバン!!：ガラガラガツシャーン!!

先生が教卓を叩くと教卓が崩れ落ちてしまった!

福「えく換えを持ってくるので少し待っていて下さい」

そう言つて先生は出て行つた

秀「全く明久よ良くもまあ、大声で話しおれるのお」

島「ホント結構うるさかつたわよ吉井」

康「：うるさい」

明「ご、ごめん」

今回は雄二に反応した僕も悪いので謝つておく

その後雄二と今後の召喚戦争の話など色々話していたら福原先生が新しい教卓を持って(それでもボロい)帰つてきた

福「では、自己紹介の続きを代表の坂本くん：」

雄「うゝい」

福「と言いたいところですが転校生の紹介です」

雄「つて、おい!!」ガクッ

そりゃいきなり話題が変われば雄二も転けるよね

「先生！転校生は女子ですか？男子ですか？」

福「二人とも女子です」

「「よっしやあああああ!!!」」

「俺の時代だー!」

「いいや、俺のだね」

「俺だ俺だ俺だー!!」

「フツ、俺だな」

「「いや、それは絶対に無い!」」

はしやぎ過ぎだ

福「では、入って来て下さい」

ガラツ!

明「えっ?」

ネ「どうも!ネプテユーン・プラネテユーンです!好きな食べ物はプリンだよ!よろしく!!」

ノ「ノワール・ラストイションよこれから一年間よろしくお願ひするわ」
なんできー!?!

ネプテューヌさんマジ勘弁してください b y 明久&ノ ワール

どうして：どうしてネプテューヌとノワールが此処に居るの!? いやそれよりも2人が居るって事はブランやベールも来てるって事!?

福「では、2人共空いてる席に座って下さい」

ネ「は〜い♪」

ノ「分かりました」

2人がそう返事をする。僕の席の後ろにノワールが左にネプテューヌが座った。つていうかよく後ろの方の席が空いていたな〜

そう僕が思っているとノワールが話しかけて来た

ノ「えつと、よろしく?」

明「えつ? あつ! うん、よろしくね!!」

明(ちよつとノワール!?!いきなりはさすがにびつくりするから!あと何で疑問形な訳!?!後何で此処に居るのさ!?!)

ノ(し、仕方ないじゃない!いきなり知らない人の振りするなんてさすがにハードル

が高い気がするのだけど!?後何で此処に居るのかは……)

明(居るのか……)ゴクリ

ノ(後で話すわ)

ガクツ

明(えっ何で!?)

ノ(だから後で話すって言うてるでしょ)ギロ

ノワールが物凄い形相で睨んで来た

明(ごめんなさい)

流石に土下座までは出来ないにしてもマジで謝った

僕がノワールと話していると(小声)ネプテューヌが話しかけて来た

ネ「これからよろしくね!明久!!」

明・ノ「あっ!!」

いきなりネプテューヌが爆弾落としてキター!!

雄「ほお、プラネテューヌは明久の事を知っているのか?」ニヤニヤ

しまった!?!最悪な奴が入ってきやがった!!

ネ「うん!私達は明久の家で住んでいるんだ!!」

もうやめて下さいネプテューヌさまお願いします!からあああ!!

そんな僕の願

いも東の間雄二がネプテューヌに質問してしまった!

雄「私達という事はラストイションも明久の家に?」

そんな雄二に即座にノワールが話しに入った

ノ「そ、そそそそそんなワケ無いじゃ無い!? ね? プラネテューヌさん!?」

いや!? 慌て過ぎでしょ!? と、そこにネプテューヌがノワールに……

ネ「ノワールいくら友達が居ないボツチだからってコミュ症全開にしなくてもいいのに? このやろ〜♪」

ノ「だ、誰がボツチよ!? 友達くらいいるわ!? 大体ネプテューヌあんた! 此処に来る前に散々言ったわよね! 私達が明久の家に住んでいる事は内緒にしようって!」

ちよつとノワールさん!? 僕の名前とネプテューヌの名前呼んじやってますよ!?

後ネプテューヌはノワールを煽らない!

ネ「何言ってるの? 冗談に決まってるじゃん!! ノワールは私達の大切な友達(仲間)だよ!!」

ノ「えっ? いやそれは……って! 騙されないわよ!! そうやってお説教から逃げる気でしょう!! 何で話したか聴いてるの!」

ネ「何でって……プリンの事考えてました(――ω――)b」

ノ「あ、アンタね〜」ゴゴゴゴゴゴ

ヤバイ！ノワールがマジで怒ってる止めに入らなくちゃ！！

ネ「でもノワールも明久の家に住んでるって認めちゃってるけど？」

ノ「えっ？……あっ！！」

それに気づいた瞬間後ろから気配が

明「はっ！殺気！！」 シュワツト

僕は素早く後ろに飛んだ……するとそこには大量のカッターやハサミが畳に刺さっていた！怖！

FFF団「「「吉井死ねエエエエ！！」」」

後ろには殺気を漂わしたFクラスの皆様がいた！その中に姫路さんや島田さんもいた

姫「吉井くんラストイションさん達と一緒に住んで居るってどういう事ですかあ？」

島「吉井！今すぐ脚の骨と腕の骨それと腰の骨を折らしてくれたら許して上げるからこっち来なさい」

特にこの2人が怖過ぎるよ！何で2人の後ろから般若が見えるの！それに島田さんそれは許したと言わないよ？

明「雄二何とかして！！代表でしょ！！」

僕が雄二に助けを求めると雄二は領き

雄「うむ、よしっ！お前ら明久をぶん殴れ〜〜！！」

明「この裏切り者のく!?」

コイツ助けるどころか状況を楽しそうに笑って見ていやがる

次にムツツリーニに頼んだ……が

ム「…裏切り者には死を」

明「やつぱりかああ!!」

チクシヨウ!この2人に頼んだ僕が悪かった!!…こうなったら

秀「うむ、お主らしい加減にせぬか、時間は無限にある訳ではないんだからのお」ば

んばん

そうやっていると秀吉が止めに来てくれた…天使や天使が居るわ此処に!!

雄「む、仕方ない…おい!お前らしい加減にしろ!!そろそろ福原先生が鉄人を呼ぼう

と電話を取り出したぞ!!」

雄二がそお言つて福原先生の方を見ると確かに携帯電話を取り出していた

Fクラス「二三席に着くので勘弁してください!!二三」ガバツ

うわ!?無駄に揃った土下座!!ほら福原先生も困ってるよ

福「えーでは、代表の坂本くん紹介をお願いします」

雄「ういー」

雄二がそう言つて教壇に立つと自己紹介し始めた

雄「このFクラスの代表になった坂本雄二だ代表なり坂本なり好きに呼んでくれ」

明「じゃあ赤ゴリラで……」

雄「明久あ！それは名前じゃなくて悪口だバカが」

明「じゃあ他に何て呼べばいいのさ!？」

雄「いつも通り雄二で良いだろ！いい加減にしやがれこのバカ」

明「あつ！またバカって言っ……」

そこで僕の言葉は止まってしまった何故なら

ネ「……………」ゴゴゴゴゴ

隣でネプテューヌがすっごい笑顔で殺気をばらまいてるんですけど!？」

雄「ん？どうしたバカ……!？」

雄二も気づいたようだ

ネ「……………」ニコニコ

雄「と、とりあえず話の続きだ……」

あつ、逃げた

雄「皆に聞こう……Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが

……………」

少し溜めて言い放った

雄「不満は無いか？」

雄二の言葉に静まり返ったクラス：次の瞬間!!

Fクラス「〃〃大ありじゃあつ!!!」

Fクラスの魂の叫びであった

雄「そうだろ？だから俺はお前らに提案がある!!俺達FクラスはAクラスに試験召喚戦争を申し込もうと思う!!」

そうかそうかくうん、コレだけは言わせて：

明「いや、無理でしょ」

そう呟く僕であった

プリンとプルルンって似てるよね? b y ファニアちゃん

いや、そんな事無いから!?! b y 明久

明「いや、無理でしょ」

その僕の呟きに雄二は反応した

雄「おい待て明久! テメエさつき俺と話したばかりだろうが!! そんな時は賛成だっただろうが!?!」

明「ごめんごめん、流石に冗談だつて〜」

雄「はあ、まあ良い馬鹿は放つといて話の続きだ!!」

僕の言葉に雄二は疲れた様に話を勧める

雄「さつきも言ったが俺達はAクラスに挑もうと思う!!」

「アホか!?! 無理に決まってるんだろ!?!」

「そうだそうだ勝てるわけ無いだろう!?!」

「戦力が違い過ぎるだああー!!」

「姫路さんやラストイシヨンさん達が居れば良い」

「勝てるわけが無いヨオツ!?!」

「ウソダドンドコドーン」

まあ、そりやそうだよな？普通最低クラスのFクラスがAクラスに勝てない事ぐらい僕でも分かる事だ　あと、最後の方ふざげないの！4番目の奴は後で折檻して上げるよっ？

雄「皆の不満も分かる・・・だが!!俺達には勝てる見込みが有る!!」

「何処にその根拠があるんだ?」

そう言われると雄二は周りを見た

雄「おい、康太。畳に顔を付けて姫路とプラネテューヌのスカートの中身覗こうとせぬにこつちに來い」

ム「・・・・・・・・!!(ブンブンツ)」

姫「は、はわわわわ!!」

姫路さんは恥ずかしそうにスカートを抑えている・・・・対するネプテューヌはと言うと・・・・

ネ「ふふん!私の下着は安くないよ!!」

ム「!?!?・・・縞パン・・・・・・・・だ・・・・と・・・・!!?(小声)」ブシヤアアアアア

明「ム、ムツツリーニ!?!」

ム「あ、明久・・・最後・・・に・・・良い・・・モノが・・・見れ・・・た」
ガクツ

明「ムツツリイイイニイイイイイ!!?」

ムツツリーニ・・・君の事は忘れない!

雄「おい、お前ら茶番はいいから話を進ましてくれ?」

おつとそうだった

・・・少年蘇生中

雄「それじゃあ進めるぞー」

ムツツリーニの蘇生も完了した後本題に戻る

雄「コイツは土屋康太。コイツがかの有名なムツツリーニ(寡黙なる性識者)だ!!」

ム「・・・!!(ブンブンツ)」

明「まあ、僕がさつき叫んでたからバレてるだろうけどね?」

雄「明久そこは黙って置くのがお約束だ」

「バカな!?!奴がああムツツリーニだと言うのか!?!」

「だが見ろ!さつきの明らかかな行為を否定している・・・!!」

「ああ、ムツツリに恥じない姿だ・・・!」

姫「??？」

姫路さんはこの話に付いて来れないのか？マークを頭から出している

ネプテューヌとノワールはさっきのクラスメイトの会話から理解したようだった

雄「姫路に関しての説明は不要だろう。」

次に姫路さんの名を呼んだ雄二

姫「わ、私デスカ？」

「そうだ俺達には姫路さんが居る!!」

「彼女の戦力はデカいぞ!!」

「姫路さん結婚してくれー!」

「これから異端審問会を始める!」

姫路さんはいきなり呼ばれて驚いたのか最後の方が片言になっていた

そして皆が姫路さんを褒めている。最後の人はクラスの皆に拷問と言う名の制裁を受けている・・・うん、アレだったらプルンとマジエコンヌの合同のお仕置きにくらべたら・・・いや、アレと比べてはダメだアレを思い出すと・・・うっ！頭があ!?!こ、これ以上考えてはダメだ!!

ネ「ちよつと明久大丈夫？」

明「あ、うん大丈夫だよ!!」

ノ「本当に大丈夫なの? なんなら保健室行く?」

明「大丈夫大丈夫!! . . . ちよつとプルンとマジエコヌのお仕置きの事思い出してただけだから」

ネ「ねぷう!?! アレを思い出してたの!?!」

ノ「それは確かに気分を悪くするわ . . . ていうか良く思い出そうとしたわね? アレは皆のトラウマよ?」

明「あ、あはは . . .」

雄「木下秀吉だっている!」

おつと次に進んだようだ

秀「ん? ワシかの?」

「どうやら自分が呼ばれるとは思って居なかつたらしく以外そんな声を上げる秀吉
「おお!!」

「確かAクラスの木下優子の . . .」

「「妹」」

秀「弟じゃ!?!」

雄「それに島田美波!」

島「えっ? ウチも!?!」

雄「ああ、お前は数学だけならBクラス並だからな」

「マジかよ……」

「スゲー……」

次に島田さんが呼ばれたが確かに島田さんは数学はBクラス並だ例えAクラスと戦つても数学なら良い勝負になるだろう

雄「それに俺も全力を尽くす!!」

「確か坂本は昔、神童と呼ばれてたな!!」

「これはいけるぞー!!」

クラスの土気も上がってきたこれなら皆も納得し……

雄「それに、吉井明久だっている」

シイイイン……

明「ちよつと雄二!!何でわざわざ僕の名前を呼ぶのさ!!お陰で土気が下がったじゃないか!」

僕がそう叫ぶとクラスの皆が話し始めた

「誰だ?吉井明久って?」

「そんな奴いたか?」

「あははく何この空気!野球すんの!」

流石に皆酷くない?最後の人は意味不明だったけど・・・

雄「そうか、知らないなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」
あ、言っちゃった

「・・・それって、馬鹿の代名詞じゃ」

明「違うよ!!ちよつとお茶目でキュートな十六歳に付けられる愛称で・・・」

雄「そうだ馬鹿の代名詞だ!!」

明「肯定すんな、このバカ雄二!!」

雄「自分の事をキュートとか言ってる奴に言われたくねえ!!」

皆酷いよ

ラ「ソレはどう言うものなのかしら?」

そこにノワールが質問してきた

雄「具体的には雑用係だ、人の数倍の力を持つ召喚獣を特例として本来干渉出来ない状態から干渉出来るようにして力仕事等をまかされる」

ネ「(・▽・)へエーそれって結構便利じゃないの?」

明「それでもないよ?もう一つ特例で召喚獣のフィードバックが有るから凄く疲れるし・・・」

「おいおい、それってつまり召喚しない奴が一人いるって事じゃん、使えねえじゃん」

失礼なちゃんと召喚するし少なくとも君たちよりもうごけるよ？

雄「安心しろ、盾にはなるだろう」

明「安心できないからね？それ僕が安心できないからね？」

雄「うっさいぞバカ！」

明「なっ!?バカって言った方がバカなんだぞ!!」

ノ「明久それ自分がバカって認めてるわよ？」

くっ!ノワールまで僕に味方はいないのか!?

雄「そこでだ！俺達の力の証明として、まずDクラスから落とそうと思う!!」

雄二がひと息入れて叫んだ

雄「皆！この設備は不満だろ？」

「「当たり前だ（のクラッカー）!!」」

誰だ！今ふざけたやつ!?

雄「ならば全員剣（ペン）を執れ！出陣の準備だ！」

「「おおー!!」」

雄「俺達のいる場所は此処ではない！Aクラスのシステムデスクだ!!」

「「うおおおー!!」」

ネ「??(???)*??おー♪」

ノ「はぁ……………」

姫「お、お……………」

クラスの雰囲気は圧されたのか姫路さんは小さく拳を上げて、ノワールは呆れた様子で、ネプテューヌはヤル気満々だった

雄「つーワケで明久には、Dクラスへの宣戦布告の使者になって貰う」

明「待つて雄二、確か下位のクラスが宣戦布告したら酷い目に合うんじゃない?」

雄「何を言ってるんだ明久?今時そんな事不良高校ぐらいでしかやっていないぞ?」

明「……………うん、それもそうだね!!じゃっ行ってくる!!」

雄「おう、逝ってこい!」

なんか字が違う気もするけど気の所為だよな!!

ノ「明久大丈夫かしら?(どう考えても坂本の顔が笑ってるから嘘としか思えないんだけど)……………ねえ?ネプテューヌ?」

ネ「……………」

ノ「ネプテューヌ?」

ネ「……………お腹減った!プリン食べたい!!」

ズコツミ（ノ）（ノ）

ノ「もうすぐ昼だから我慢しなさい!!（全く心配して存したわ……まあ明久も結構素の状態でも強くなってるし大丈夫かな?）」

ネ「プリン……（ω・ω）」

Dクラス前

明「ガラツ!すみませ〜ん、Dクラス代表いますか〜?」

平「俺が代表の平賀源二だ俺に何の用かな?」

明「うん僕は吉井明久、ちよつと伝言をね?」

平「伝言?」

僕は息を吸って言った

明「僕たちFクラスはDクラスに試験召喚戦争を申し込む!!」

「「……な、なんだってー!?!」」

ノリいなこのクラス

平「む、Fクラスが俺達に宣戦布告か……良いだろう日程は昼休みが終わった後で

いいか?」

明 「うん、それで構わないよ！よろしく!!」

平 「ああ、よろしくな！」

明 「じゃっ！用事も終わったし僕はこれで！」

僕が帰ろうとするとDクラスの人とに掴まれた

明 「なにかな？」

「Fクラスが調子に乗ってんじやねえよ!!」

くっ！これは雄二に騙されたか!?!↑今更気付くバカ(笑)

うっさいわ!!馬鹿ファニア!!

ププー負け犬の遠吠えく(* ≧艸 ≦) ププッ b y ファニアちゃん

後で校舎裏な(^ ω ^ #)

すみませんデシター

「オラ吉井無視してんじやねえ!!」ブンッ

Dクラスモブ 「誰がモブだ!!」はそう言うと同時に殴りかかって来た

明 「よっ」ヒョイッ

明久はそれを意図も容易く避けた

「なっ!?!」

明「……………そつちからやって来たんだからね？」ガストツ
「ごばでい!!」

僕はカウンターで相手の腹を殴ると相手は直ぐに倒れた

「……………なつ!マジかよ!?!」

「うちのクラス最強の東堂がヤラれた」

「それはホモ的な意味で?」

「違うわ!!?」

「ヤラないか?」

「ウホツ!良いオトコ」

「アアーーーー♂」

「何がしたいの!お前ら!?!」

明「……………えつと……………良いかな?」

平「はつ!済まないウチのクラスの者が……………」

明「別に良いよ!それに平賀くんが謝る事じゃないよ!」

平「済まない……………で?改めて聞くが昼休みが過ぎた後でいいか?」

明「うん、構わないよ」

そうして僕はDクラスをあとにした

その頃Fクラス

雄「くくく、今頃明久はボロボロになってるだろうな」

秀「お主も酷い奴じゃのお」

雄「なに、騙されるアイツが悪い」

明「ガラツ、ただいま」

雄「おう帰って来たか………って何で無傷なんだ!？」

明「やっぱり騙してたか……このバカ」

ネ「明久おかえりどうだった？」

明「今日の昼休み過ぎって事になったけどそれで良かった？」

雄「ああ、それで構わないぞ？」

姫「吉井くん大丈夫ですか？」

明「うん、大丈夫だよ、心配してくれてありがとう姫路さん」

島「でも本当に大丈夫? 痛いと来ない？」

明「えっ? うん、まあ……」

島「それは良かったわ」

何だかんだ行つて島田さんも優しs・・・

島「吉井をまだ殴れるわね？」

明「アイタタタタタタ!? 実は骨折れてたんだつた!!」

少しでも感心した僕の心返して!?

雄「おい、お前らさっさと飯食う為に屋上行くぞ、姫路、ラストイシヨン、プラネテユー

又、島田も来い」

皆「「はーい」」

続くのだー

食べ物の怨みは恐ろしいと知れby明久
その気持ち
めっさわかるわbyファニーちゃん

ー屋上ー

明「で？僕やムツツリーニ、秀吉に姫路さんや島田さんは分かるけど何でネ・・・プ
ラネテュー又さんやラストイションさんも呼んだのさ？」

あの後、僕たちは雄二に誘われて屋上に来た。僕はネプテュー又たちが何故呼ばれた
のか雄二に聞いてみた。

雄「ん？ああ、それに関しては後で説明するからまずは飯にしようぜ？」

雄二はそう言ってフェンスの前にある階段に腰を下ろした。

そして、僕たちも適当なところに腰を下ろした。

秀「そういえば明久、今日は何か食べる物を持ってきたのかのお？」

明「え？う、うん持ってきたけど・・・」

そう言って僕は鞆から弁当を取り出す。

すると雄二たちが驚いていた・・・なんでさ？

雄「マジかよ!?!明久がまともな食事を持ってきただど!?!」

秀「うむ、驚きなのじゃ・・・」

ム「・・・!!?驚きを隠せない!」

そこまで言わなくても(・ω・)

雄「いや、弁当と言つても中身は質素な感じなんだ!そうに決まっている!!」

秀「そ、そうじゃな!」

ム「・・・(コクコク)!!」

決めつけ良くない(・;ω;)

明「はあ、なら見てみれば?」パカッ

そう言つて僕は弁当箱を開いた・・・あれ?

雄「マジか・・・美味そうな弁当じゃねえか・・・つてどうした明久?」

明「えっ!?!あ、何でもないよ!」

秀「しかし、美味そうじゃのお?プリンまで入つておるし・・・」

明「ありがとう秀吉」

皆から見れば確かに何の変哲もない弁当だろう・・・しかし僕は気づいてしまった・・・メインの唐揚げが一つ減っている事に!!その代わりと言わんばかりに野菜類が何割か増えている事に!!一体誰が・・・はっ!ガバッ

そう思つてネプテューヌ又たちの方を見て見るとネプテューヌと目が合った・・・する

とネプテューヌ又は≡(。D。シ。サツと目を逸らして口笛を吹いている♪(。ε。シ
明(ネプテューヌウウウ!!やっぱり君か!?)

ネ(いや、明久悪気は無かったんだよ!?!ただ唐揚げが私を誘惑して・・・それに!プリン
は取らなかつたよ!?!私にしては凄くない!?)

明(うん、ネプテューヌつまみ食いの罰で明日のオヤツのプリン無しね?)

ネ(ねぶ?!それだけは止めて!!謝るからさ!!今度ナス分けて上げるから!!)

明(それってネプテューヌが嫌いな食べ物を僕に押し付けてるだけじゃん!?)

僕とネプテューヌがアイコンタクトで言い争いしていると姫路さんが雄二に話しかけた。

姫「えっと・・・吉井くんは何時もはお昼ご飯を食べないのですか?」

明「いや、そういうわけじゃ・・・」

雄「アレは食べているとわ言わん」

秀「うむ、明久の主食は水だったからのお」

姫・島・ノ「「水う!?!」」

うん、流石に驚くよね?あと、ノワールには前に話したよね?ネプテューヌに関して
はめっさ笑ってるし・・・(後でノワールに聞くと完全忘れてたらしいデス)

島「そんなんで良く生きていけるわね?」

明「いや、一様塩入れて食べてたよ？」

雄「それは食べてると言わん!!」

秀『『飲む』が正解じゃな』

ご最もです・・・

姫「えつと、吉井くん？その弁当は誰が作ったんですか？」

明「え？僕だけd・・・」

姫・島「嘘ね(ですな)」

速攻で否定された(´・ω´、)

明「いや、ホントだよ？」

姫「嘘だ!!」

竜宮レ○!?

島「そうよ！今まで水で生活して来た奴がこんな美味しそうな料理作れるはず無いじゃない!!」

ぐつ、正論を・・・

島「で？誰に作って貰ったのよ？考えるとしたら木下かプラネテューヌさんかラストイシヨンスンだけど・・・」

明「いや、違うって!？」

島「!?まさか坂本か土屋に!」

僕がどう言っても島田さんは聞いてくれないのです

ネ「明久が言ってる事は本当だよ?」

そこに今まで何故か黙っていたネプテューヌが喋った。

雄「そういえば、プラネテューヌたちは明久のところに住んでいたんだっただな?」

ネ「うん!明久の料理は美味しいよ!!特にコンパと一緒に作ったプリンなんかほっぺが落ちるほど美味しんだから!!」

そう言っただけでネプテューヌは昼ご飯から詰めて来たのか僕と同じ具材が入った弁当を開いた。てか、勝手に出てきたの?ノワールも・・・

雄「マジか・・・てかコンパって誰だ?」

そう雄二が聞くと次はノワールが喋った

ノ「コンパっていうのは私たちが前に住んだところに住んでた子よ?あと、ネプテューヌが言ってる事は事実よ?私たちの中で一番料理がうまいのが明久なのよ?」

そうノワールが説明した事により姫路さんと島田さんはとりあえず腰を下ろしてくれた。さっきまで忘れたけど・・・

明「確かに今までは生活費がなくて水だけだったけど今は落ち着いてるから」

雄「いや、それはお前が漫画やゲームに生活費のほとんどを注ぎ込んでるからだろ?」

明「返す言葉もございません」

雄「ほう、返す言葉なんて言葉知っていたのか？」

明「流石にバカにし過ぎじゃないかなあ!？」

全く失礼な奴め!!それぐらい知ってるわ!!

つ・づ・く・デス!!

学園長って妖怪らしいよ?byファニアちゃん
いや、失礼過ぎるでしょっ!?!by明久

僕たちはあの弁当騒ぎから何事も無く皆で話しながらも昼食を済ませた。

明「で?雄二、さつきも言っただけどネプテューヌらを呼んだのは何故なのさ?」

僕は弁当を食べ終わって爪楊枝を咥えた雄二にネプテューヌたちを呼んだ理由を再び聞いた。

雄「ああ、その事か・・・なに、プラネテューヌたちの戦闘力もとい点数等を聞いておきたかったからな。点数を知っておけば戦略も組みやすいしな。」

ネ「うーん(ーわー、)さつきからみんな私たちの事プラネテューヌとか呼んでるけど別にネプテューヌとかネプネプとかネプ太郎とか好きに呼んでも良いんだよ?プラネテューヌって呼ばれた慣れて無いし・・・」

ネプテューヌがそう言うのとノワールも話に入っっていく

ノ「ネプテューヌの意見には私も賛成よ、私の事もノワールで良いわ」

そうノワールが言っただけでもそれに賛成する

雄「む、そうかじゃあ遠慮なくネプテューヌとノワールと呼ばしてもらおうか」

秀「うむ、ネプテューヌにノワールじやな了解した」

ム「……ネプ太郎にノワ之助」

ノ「ちよつと待ちなさい土屋くん！私は好きに呼んで良いなんて一言も言つて無いわよ!?!」

ム「……では、ノワールで」

ノ「ん、それで良し！」

ネ「あれ？私の名前は修正無し!？」

ノ「貴方のは自分から言つたんでしようが……」(――ド――)――3ハア

ネプテューヌの叫びにノワールが呆れながらもつつこんでいると姫路さんが話しかけた。

姫「えつと、ノワールちゃんにネプちゃんが良いでしょうか？」

ネ「うん！良いよ!!」

ノ「構わないわ」

島「じゃあ私もネプテューヌにノワールって呼ばして貰うわ」

ネ「うん！」

ノ「ええ」

良かったネプテューヌとノワールはこの面子に溶け込めたようだ。

雄「じゃあ2人とも俺たちのことも名前で呼んでくれ!」

ネ「りよ〜かい! しました!!」

ノ「分かったわ」

雄「んじゃ! 転校生との親睦も深まったところで作戦会議を始める!!」

雄二のその掛け声とともに皆反応は違えど良い返事を返した。

―― 時間が少し飛んで試召戦争 ――

高「では、補充テストを開始します。・・・始め!!」

今回のFクラス補充テスト担当の高橋先生の合図によつて補充テストが始まった。

このテストを行っているのは、僕、ネプテューヌ、ノワール、姫路さんの4人だ・・・

何故ネプテューヌたちも受けているかというところ・・・どうやら学園長がクラス配布を

決めたらしい、何でもクラスが丁度AクラスとFクラスが2人ずつ足りなかつたらしい

い・・・ 原作ではFクラスが一番多いとかそんな設定だったと思うけど気にし

ないですね? b y ファニアちゃん

―― 5分後 ――

明（うん、これなら早めに抜けても問題ないかな?）

僕はそう思いテストを高橋先生に提出する。

姫「えっ!? 吉井くんもう終わったんですか!？」

案の定姫路さんが驚いている。

明「うん、あくまで僕は困役だからね」

高「では、点数を付けてますので吉井くんは行って構いませんよ?」

明「はい、ありがとうございます」

ネ「明久頑張ってるね〜(´・▽・´)ノシ♪」

明「了解!!」

―― Fクラス中央 ――

明「島田さん!」

島「よ、吉井!! もう補充テスト終わったの!？」

明「うん! 早めに切り上げてきたんだよ!! それより今の戦況は!」

島「まだ人は残ってるけど何人かは殺られてるわ・・・」

くっ! やっぱりDクラスとFクラスじゃ戦力が違うか!!

「Dクラス伊藤和正がFクラス島田美波に現代文で挑みます!! ―― 試獣召喚 (サモン)

!!」

そう言つて槍を持った相手の召喚獣がでて来た!

島「えっ!?!ちよっ!?!」

明「島田さん僕が変わりに出るよ!!——試獣召喚(サモン)っ!!」

僕がそう叫ぶと紫と白の服を着たちっこい僕がいた……つてあれ?召喚獣の服がヤンキーみたいな服装からゲームギョウ界にいた時と同じになっている……武器は相変わらず木刀だけ……

科目——現代文——

Dクラス 伊藤和正 84点

Fクラス 吉井明久 102点

伊「なっ!?!Fクラスがこんな点数を!?!」

明「現代文は暗記が多いから少し得意なんだ!!」

そう言つて僕は召喚獣を相手の懐に潜り込まして、思いつき木刀を相手に突き出した。

Dクラス 伊藤和正 0点

伊「なっ!?!」

伊藤が倒されると同時にDクラスの皆が慌て始めた。

「マジかよあんな点数の奴にどう勝てば……」

「諦めないの！この人数でかかれば流石に相手もきついはずよ!!」
「やっぱりそう来るよね？」

「「試獣召喚!!」」

Dクラス モブA 71点

Dクラス モブB 91点

Dクラス モブC 66点

Dクラス モブD 69点

「「俺ら（私たち）の扱い酷くない!」」

「気の所為デスよ? b y f a ニアちゃん

「「行け!!」」

その合図と共に全員が襲いかかって来た。

明「うん、数で攻めるかあ、悪く無いけど・・・遅い!」

「そう僕が言った時にはDクラスの召喚獣は皆倒れてた。」

DモブB「!?如何して!?!」

驚いてる相手に僕は説明してあげた。

明「召喚獣にもね急所があるんだよ人間と同じ所に・・・僕はそこを狙っただけだ

y . . .」

鉄「戦死者は補習ー!!」

!?鉄人!?

DモブA「て、鉄人!?嫌だ!補習室は嫌だ!!」

鉄「黙れ!!この試召戦争で戦死したら補習室で戦争が終わるまで特別講義だ!たつぷりと指導してやるからな」

DモブC「嫌だ!あんな拷問耐えられない!」

鉄「拷問?安心しろそんな事しない。ただ補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬する人は二宮金次郎、となるよう仕立ててやろう」

それは洗脳じゃないのかな?

DモブD「嫌だ!死にたくない!死にたくない!」

・・・とりあえず初戦闘は勝利で終わった

続くに決まってる

ワシらこの小説で結構影薄くないかのお？　by 秀吉

………確かに　by ムツツリーニ　　so、ソナ
コトアリマセンヨ？　　by ファニアちゃん

島「ありがとう吉井、助かったわ・・・にしてもアンタあんな点数どうやって取ったのよ？まさかカンニングじゃないでしょうね？」

明「違うからね!?!さっきも言ったけど僕結構現代文が得意だからいちよう解るところが結構合ったからあれだけ取れたんだよ」

島「ふくん、まっそこまで言うなら信じて上げるわ・・・改めて助かったわ」
明「ふふっ、どういたしまして」

僕らがそのような会話をしているときなり何が僕の隣を通った。

? 「おくねくえくさくまあああああ!!!」

その何かはそう叫びながら島田さんに抱きついた。

島「ちよっ!?!み、美春!?!なんでアンタが此処に!?!」

どうやら知り合いのようだ。

まあ知り合いじゃ無かったら見ず知らずの人にお姉さまと叫びながらつつ込むHE
☆N☆TA☆Iだからね? by ファニアちゃん

何気に入つて来んなし. . .

つとそんな事思っているうちに2人とも召喚獣を出して戦っていたようだ. . . あ、島
田さんの召喚獣が押し倒された!! そこでやつと点数が浮かび上がったようだ。

科目ー 科学 ー

Fクラス 島田美波 53点

Dクラス 清水美春 94点

む、40点も点数が離れてるコレは僕と違って召喚獣を全然召喚してない島田さんが
不利だ。

清「さ、お姉さま。勝負はつきましたね? さあ私と保健室へ参りましょう!」

清水さんは刀を召喚獣の喉元に突きつけながら凄い事を言っている。

島「ちよつと待ちなさい! アンタなに考えてんの!？」

清「ふふふ、安心してくださいお姉さま、保健室のベッドは今の時間空いていますか
らね」

島「そのどこに安心しろつていうの!! 不安しかないわよ! つて、いゝやゝ!
誰か助けてゝ!!？」

清「ふふふ、お姉さま〜!!」

明「サモン!!」ズバツ

島「え?」

清「ふえ?」

科目ー 科学 ー

Fクラス 吉井明久 65点

Dクラス 清水美春 0点

明「島田さん大丈夫?」

島「え?あ、ええ!大丈夫よ、助かったわ吉井」

清「くっ!よくも美春とお姉さまの愛のひと時を邪魔して・・・殺します!!」

え!なに!?すっごい物騒な事呟いてるんだけどこの子!?

島「鉄じー!西村先生、早くその危険人物を補習室に連れて行って下さい!!」

鉄「おお、清水か。たっぷりと勉強漬けにしてやるぞ。・・・あと、島田お前さつき

鉄人と言いかけなかったか?」

島「き、気の所為ですよ。あはははは(汗)」

鉄「む、そうかなら良いが・・・では、行くぞ!」

清「お姉さま!美春は絶対に諦めませんから!このまま無事にそと・・・」うるさいぞ

!清水!!」.はい」

そんな言葉と一緒に清水さんは鉄人に連れていかれた。

明「さて、島田さんお疲れ。科学の補充テスト受けてくるといいよ」

島「そうさせて貰うわ.あんた達も頑張りなさいよ!」

Fクラス「「おう!」」

その僕達の返事に島田さんは満足そうにFクラスえと戻っていった。

明「よし、ここからが正念場だ!前線を維持して、敵を1歩も進ませないように!!」

Fクラス「「おおおおおお!!」」

さあ、ここからが気合の入れどころだ!!

「Fクラスめ、明らかに時間稼ぎが目的だ!」

Dクラスが僕らの意図に気付き始めた!?.こうなったら!

明「須川君!」

須「(やつと名前が出た!)なんだ?」

なんかメタ発言があつた気がするけど、まあ良い

明「偽情報を流してほしい!」

須 「別に構わんがどんなのだ？」

明 「先生たちに流して、ほかの場所に迎わして！」

須 「ああ、分かった！流す内容はまかしてくれ！」

「吉井！Dクラスが船越先生を呼んだようだぞ!!」

なっ?!不味い！数学の船越先生（45歳♀独身）を呼ばれたらさつきDクラスが数学の木内先生を呼んだという情報が入ったからDクラスに部がある状態になっちゃう!!

ピンポンパンポーン 《連絡します》

僕が焦っていると校内放送が流れた。この声は須川君だ!!

《船越先生、船越先生》

しかも丁度相手が呼んだ船越先生。ナイスだよ須川君！

《2年Fクラスの吉井明久君が体育館裏で待っています》

・・・あれ？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大切な話があるそうです。》

ちよつとお?!須川君らんらん!?

《至急体育館うら・・・なにやってんのよ!!》え？なに？ゴハアツ!!》

え? ノワール?

《え〜先程の放送は彼の照れ隠しなので婚姻届を持って放送室へ来て下さい》

えつと、助かったの? . . . はあく良かったあコレはノワールに感謝だね、今度お礼しないと

明「さあ、皆! 須川君の身体を張った揺動作戦のお陰でコチラに勝負が傾いてる! あと少し耐えてくれ!!」

「「おうよ!」」

明「さて、僕も行きますか!」

「ぐあ!?! なんだコイツ強え!」

あの後、Dクラスを倒しながら前へ進んだ。

雄「良くやった明久!! こっちの準備は整った!!」

よし! 丁度僕もDクラスに入った所だ!

明「Fクラス吉井明久がDクラスの代表平賀君にー」

玉「Dクラス玉野美紀と . . .」

DモブE、F「俺達が受ける」

「「サモン!!」」

明「くっ！近衛部隊か!!」

平「残念だったね？船越先生の彼氏くん？」

明「いや、それは須川君だから」

平「そうなのか？まあ、いい、キミには驚かされたよまさかFクラスで観察処分者のキミがここまで来るなんて・・・でもそれもここまでだ！流石に消費した点数で3人も相手出来ないだろ？」

明「確かにさつきまで英語でやってきて6点まで減つちやつてるから平賀君に勝つことさえ難しいだろうね？・・・だから姫路さん、よろしくね」

平「は？」

姫「あ、あの・・・」

惚けている平賀君の肩を後ろから姫路さんが叩いた。

平「え？なんでAクラスの姫路さんがここに？」

姫「えっと、Fクラスの姫路瑞希がDクラスの平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

平「は、はい」

姫「さ、サモンです」

科目ー 現代国語 ー

Fクラス 姫路瑞希 339点

Dクラス代表 平賀源二 129点

平「え? あ、あれ?」

平賀君はあまりの出来事にまだ理解出来ていないようだ。

姫「ご、ごめんなさいっ」

姫路さんのその言葉とともに姫路さんの召喚獣が持つ大剣が平賀君の召喚獣に振り下ろされて戦いの決着がついた。

「「イヨツシヤアアア」」

「「そんなあああ」」

決着がついたあと、Fクラスは歓喜の叫びを上げ、Dクラスは絶望の悲鳴を上げた。

平「まさか姫路さんがFクラスだったとは・・・」

雄「まあ、油断させるために姫路を送ったみたいなものだしな」

平「俺達がFクラスを甘く見ていたと言うことか・・・とりあえずルールに従ってク
ラスを交換しよう、しかし時間が時間だ。明日でも構わないか?」

明「もちろん、良いよね雄二？」

雄「いや、その必要はない、Dクラスを奪う気はないからな」

「「はあああああ?!!」

皆が不満の声を上げるがまあ仕方ないだろう

雄「ええい！うるさいぞお前ら！俺達の目標はあくまでもAクラスのはずだろう？」

「それはそうだが・・・」

雄「とりあえず言うこと聞いてろ。安心しろちゃんと考えはある・・・それでDクラス代表平賀よ条件を付けよう」

平「その提案は嬉しいがその条件とは？」

雄「なに。そんな大したことじゃないさ、外のあれを壊してほしい」

そう言つて雄二はDクラスの外にあるBクラス用の室外機を指さした。

平「それだけでいいのか？」

雄「ああ、教師には少し目を付けられるが悪くないだろう？」

平「確かに願つてもないことだ。いいだろその条件を呑もう」

雄「タイミングは後日詳しく話す。今日はもう行つていいぞ」

平「ああ、ありがとう。Aクラスに勝てるかと願っているよ」

雄「ははっ、皮肉として受け取っておくぜ」

そう雄二が言うと平賀君はじゃあ、とDクラスを連れて去っていった。

雄「さて、皆ご苦労だった！明日の補充テストの為、帰って休んでくれ！解散！」

その声で皆がどンドン帰って行く

ネ「ねえねえユウジン私達は次には出れるの？」

今回召喚戦争に雄二の作戦で参加出来なかったネプテューヌが雄二に疑問をぶつけた。

雄「ああ、今回はFクラスの最大戦力を姫路だけと思わず為にネプテューヌやノワールには退いて貰ったが次のBクラス戦では存分に暴れてくれ!!」

ノ「そうね、じゃあお言葉に甘えて暴れさせて貰おうかしら」

秀「と言うかBクラスなんじゃな？」

雄「ああ、だが安心しろ必ず俺が勝利に導いてやる！」

島「へえ、頼もしいじゃない」

ム「. (コクリコクリ)」

島田さんの言葉にムツツリーニも頷く

明「じゃあ今日はもう帰って明日頑張ろう!!」

「「「お お お お お!!」」」

閑話 いーすん怒りすぎると胃に穴が空いちやうよ?

byファニアちゃん アナタもその原因の一人なん

ですけど!?! byいーすん

明久達が謎の亀裂に落ちてから5時間後の某プラネタワー

秘書イストワールは用事を終えてプラネテューヌにあるプラネタワーに帰って来ていた。

イ「さて、ネプテューヌさんはちゃんと仕事をしているのでしょうか?」

いーすんはそう言って仕事場へ向かった。(いーすんとはイストワールのあだ名である・・・考案者ネプテューヌ)

イ「何度でも言いますがいーすんてはなくイストワールと呼んで下さい!!……」
さて、書類はっと

ナレーターにツツコミながらも仕事のチェックをするいーすん真面目やわく

イ「貴女は不真面目過ぎですけどね」

そ、それより先ずは書類を調べしよ?

いーすんは「そうですね」と言つて書類に目を通す・・・それから10秒ぐらいしたらぶるぶると震えだした。かわいい（確信）

イ「如何して一つも進んでないんですかあああああ!!?」

あ、爆発した・・・いーすんはそう言つて物凄い速さで部屋を出て行つた。

イ「ネプテューヌさああああん!!」（#。D。）「バアン!!」

そう叫びながらいーすんはネプテューヌの部屋の扉を力任せに開けて物凄い音を出して出た。・・・あの、ちっさい身体でどうやってこれ程のデカイ音を出せるように扉を開けるのだろうかΣ（?□?!!）

いーすんが部屋に入るとそこには誰も居なかつた。

イ「あれ?先程リビングも見て来ましたがゲーム機が置いて有るだけで誰も居なかつたので部屋に居ると思つていたのですが?」

そう言つていーすんは疑問を浮かべていた。・・・ていうかいつの間にかリビング見て来たんだろう?

イ「しかし此処に居ないとすると明久さんの部屋でしょうか?」

そう、つぶやきながらいーすんは明久の部屋へ向かつた・・・

30分後

イ「そんな、他の女神様達まで居ないと・・・」

あの後いーすんは明久の部屋に向かったが誰も居らず仕方なくいーすんは協会へ行き他の協会とコネクトを取りださずねてみたが結果は同じで、しかも他の国の女神まで居ないと言う

イ「おかしいですね、クエストに行つたとしても街の人達が見ているはずですし、何より他の女神様まで居ないとすると・・・どうしましようか?」

?「どうしたんですかイストワール様?またネプ子かネプギアと明久のコンビが何かやらかしたのですか?」

?「あ、いーすんさんですう」

いーすんが悩んでいると後ろからクリーム色の髪をしたのほほんとした雰囲気を出している少女と茶髪を緑色のリボンでサイドテールにしたツンツン(というかツンデレ?)した雰囲気の少女が立っていた。

イ「あ、アイエフさんにコンパさんこんにちは・・・いえそういうワケではないんですよ」

コ「はいです、こんにちはですう」

ア「こんにちはは、それで?そういうワケではないと言うのは?」

いーすんはこれまでの出来事をコンパとアイちゃんに話した。

イ「それでお2人は女神様達を見ましたか?」

ア「いえ、見てませんが」

ア「あ、私見たですよ？」

イ「そうですねn・・・てっ！コンパさん本当ですか!?!Σ(・□・;)」

コ「はいです！確か朝此処に少し用事があったのでリビングに行ったらネプネプとアキアキが女神様達とゲームをしていたのです！」

イ「それはいつ頃ですか？」

コ「確か・・・お昼前だったと思うです！」

イ「という事は私が出ていってかそこまでたつてなかった時にはまだ居たと」

ア「さっきネプテューヌ達に携帯に電話してみましたけど繋がりませんでした。」

イ「そうですね・・・(ω・ω)」

？「ただいま。あ、アイエフさんにコンパさんこんにちは、いーすんさんも戻って
いたんですね？」

いーすん達が話して居るとネプテューヌと同じ薄い紫色の髪をしてネプテューヌと
明久と同じ髪飾りをした長髪の少女が話し掛けてきた。

イ「あ、お帰りなさいネプギアさん、ネプテューヌさんか明久さんを見ていませんか
？(・ω・)」

彼女の名ネプギア簡単に言うとなぷテューヌの妹で趣味は機械弄り。

ネプギア（以後ネと表示します。しかしまだ先の話ですがネプテューヌがネプギアと出て来た時のみギと表示させて頂きます）「え? お姉ちゃん今日は1日中ゲームをするって言っていたので家に居ると思ったのですけど、居ないんですか?」

イ「まあ、ネプテューヌさんが言っていた事はあとにして（#^ω^）えっと、実はですね・・・カクカクシカジカ」

ネ「シカクイムーブ・・・そんな事が」

ネタが古くない? ↑ネタを考えている人

ネ「そういえば少し前に明久さんと一緒にねぶねぶフォン（プラネテューヌが開発した携帯、作った人物は発表されて居ないが・・・まあ、分かる人は分かるだろう）の機能を少し改造して圏外関係無しに繋がる機能を私と明久さんの携帯に加えて見たんですけど・・・かけてみますか?」

ネプギアはそう言って白と薄紫の配色の携帯を取り出した。

皆さんコレはフィクションですファンタジーです。開発者などの許可なく携帯の改造はしてはいけません! 犯罪ですからね!!

イ「本当ですか!?! ではお願いします!!」

ネ「では」

ピピピピピピピピ

イ「明久さんが住んでいた世界……つまり異世界ですか」

明『うん、実際に今いる場所が僕が住んでる家だしね』

イ「むー、異世界となるとコチラに連れ戻す事も難しいですね……それと身体の具合はどうですか? ダルかったりしませんか?」

明『ダルさとかは無いけど、ネプテューヌは?』

ネ『私はこの通り元気ハツラツです!! \?? (, ω ,) ? / /』

イ「そうですか……となると気絶していた時間が合わないという事で……(――)」
そう言っついていーすんは考えこんだ

明『え? なに? どういうこと?』

イ「あ、すみません。恐らくコチラがわ、つまりゲームギョウ界と明久さんの世界は時間の進みが違うんだと思います。コチラでは、明久さんの証言が確かであれば明久さん達は5時間ほど気絶していたはずですよ。しかし身体からダルさが無いという事はそこまで長い時間気絶をしていないこととなります」

明『長い説明ありがとうございます! (後ろでコンパとネプギアが『教えていーすん先生』と書かれたホワイトボードを持って来たけどツツコミを入れたら負けだよね?』)

イ「はい、どういたしまして(;)」

いーすんが律儀にお礼に挨拶をすると急に画面にノイズが走り始めた

明『それ・・・あ・・・して・・・い』

イ「えノイズが走って聞こえませんか!!」

明『もう・・・切・・・か・・・み・・・ん切りま・・・』ブツン

イ「あ!ちよつと!?!Σ(皿、;)」

ネ「あー、やつぱり別次元からの通信となると時間制限が付くそうですね・・・15分か、まあ、もった方でしようね、もう少し改良が必要かな?」

コ「切れちやつたです」

ア「でも、ネプテューヌ達が無事だということもわかった事だし良い収穫じゃない?」

イ「そうですね・・・よし!アイエフさん!」

ア「あ、はい、なんですか?」

イ「すみませんがm() mそちらで謎の亀裂について調べてくれませんか?コ

チラでも出来る限り調べますので!」

ア「わかりました」

イ「コンパさんはアイエフさんの手伝いを、ネプギアさんは謎の亀裂の発生源を調べる事が出来る装置を作ってもらえないでしょうか?」

コ「頑張りますです!」

ネ「わかりました。私もお姉ちゃん達には速く帰って頂きたいので頑張ります!!」

81 閑話 いーすん怒りすぎると胃に穴が空いちゃうよ? by ファニアちゃん
その原因の一人なんですけど!?! by いーすん

こうしてゲームギョウ界組も動き出した。

この作品ネプテューヌ要素少ない気がする!? by ファ
ニアちゃん何を今更 by 坂本雄二のお
嫁さん霧島翔子 おいこら!! by 赤ゴリラ

Bクラス戦の翌日 Fクラス

雄「皆少しいいか、お前たちに言いたいことがある!」

朝、Fクラスに全員集まった時に雄二が教壇に立ちいきなり言いたいことがあると言
いだした。

雄「あー、なんとというかだな . . . Aクラス戦前だがここまで来れたのは皆のおかげ
だ!!」

秀「どうしたんじや雄二?らしくもないこと言つて?」

ネ「うん、気持ち悪いよ?」

ノ「ええ、気持ち悪いわね」

雄「お、お前らなあ!!」

明「あつはは!!気持ち悪い気持ちw(シユカツ) え?」タラー

僕が笑っていると頬の隣りを何かが通過して頬から血が出てきた。

後ろを見てみるとカッターが畳に刺さっていた。

雄「次は当てる・・・」キリキリ

そう言つて雄二は次のカッターを取り出して装填を完了していた。

明「すみませんでしたm(´`´)m」

僕は全身全霊の土下座をした。

雄「まあ、そのバカはほつといてAクラスに今から宣戦布告に行く」

明「嫌だもう僕は行かないからな!!」

雄「最後まで話を聞けバカ久! 今回の宣戦布告は俺と明久、ムツツリー二に秀吉と姫

路、島田、そしてネプテューヌにノワールド!」

「おい! 坂本! 何ラステイションさん達を呼び捨てにしてるんだ!」

雄「ん、ああ、本人達の許可は貰つてる」

「只今より異端審問会を始m・・・」少し黙つてくれないかしら?」イエスマム!!」

なんか怪しい雰囲気になったけどノワールが睨みをきかせて黙らした。

雄「それで俺達は今回Aクラスに交渉して一騎打ちで殺ろう思う!!」

雄二漢字自重して

「そうか! 姫路さんやプラネテューヌさん達が一騎打ちに出れば勝てるかも知れないか

らか!!」

そうFクラスの1人が言った。

雄「いや、一騎打ちには俺が出る!!そして相手も決まっている・・・Aクラス代表霧島翔子だ!!」

コレに関しては皆予想外の出来事だったらしく呆然としている・・・もちろん僕も

ノ「本気で言ってるのかしら?雄二」

雄「ああ、もちろんだ!」

明「いやいや、無理だつて!バカで無能でブサイクな雄二が綺麗で真面目で学年主席の霧島さんに勝てるはずg・・・!緊急回避!(シユカツ)」

雄「ちっ?!避けやがったか!」

危なかったた今のは避けなければ当たっていた。

明「だから危ないだろ雄二!・・・で?なんで雄二が霧島さんと闘うのさ?姫路さんやネプテューヌ、ノワールが闘った方が確実に勝機はあるでしょ?」

雄「いや、一騎打ちでフィールドを限定すれば勝てる」

ネ「フィールドつて何の教科で殺るの?」

ネプテューヌさん自重して下さい!

雄「教科は日本史だそれも小学生の問題でしかも方式は百点満点のテストでの点数勝

負だ」

秀「?小学生じゃと?それでは勝負はつかんのではないか?霧島相手じゃと集中力切れるまで待つとしても雄二が持ちそうにないぞ?」

雄「確に秀吉の言う通りだがアイツは確実に日本史の問題の『大化の改新』を間違える」

姫「小学生問題ですと何年かと言う問題でしようか?」

—— 此処から先は原作と一緒になのでカット! (決して面倒だからじゃないんだからね!)

Aクラス前

? 「一騎打ち?」

雄 「ああ、そうだ」

雄二は今Aクラスの交渉役の秀吉のお姉さんである木下優子さんと交渉をしている。

雄 「で?どうだ?」

優 「嫌よ、そっちからは点数の高い姫路さんやラストイションさんにプラネテューヌさんがいるじゃない?わざわざ負けるリスクのある闘いを受ける気はないわ」

確にそうだそなんだつたら試召戦争の方が勝つ確率は相手の方が高い

雄 「出るのは俺何だが?」

優「信じられないわ」

やはりこの交渉はむr・・・

？「なら、7対7の一騎打ちなんてどうでしょうか？」

え？

優「り、リーンボックスさん」

べ「ボールで構いませんよ優子さん」

話に入ってきたのはボールだった！（ジヨジョ風）

いきなりの乱入者に驚いたけどボールの申し出は有り難い

べ「それで構いませんか？Fクラス代表さん？」

雄「ああ、コチラとしては願ってもない事だ」

優「ちよつとまつてちようだい！り：：ボールさん！まだ代表が認めてn：：」

やつても良い」って！代表!」

木下さんがボールの意見に反論していると代表の霧島さんがいきなり出てきた・・・

びつくりしたーΣ（ ㄩ、；） てかなんでノワール達は驚いてないの？

雄「翔子か・・・」

霧「・・・雄二その代わり条件がある」

雄「その条件とはなんだ？」

霧「……………勝った方が負けた方の言う事を聞く」

雄「おつし!それで良いぜ!」

霧「……………優子もそれで良い?」

優「はあ、代表がそう言うならそれで良いわ」

雄「では、時間は10時から良いか?」

霧「……………それで構わない」

雄「じゃあ俺達は教室に戻るぞ」

そう言つて僕達はAクラスを出ていった……………その間ボールがこちらを見てい
るのは気になったが

Aクラス戦

高「それでは両者準備は良いですか?」

先生が両者の代表に聞く 担当者は高橋先生だ。

雄「ああ」

霧「……………問題ない」

高「それでは1人目お願いします」

秀 「ワシじゃな？」

優 「あら、秀吉が相手なの？」

「どうやら1回戦は姉弟対決だ」

秀 「フフフ、姉上よワシには秘策がある」

優 「秘策？何よそれ？」

「そう言う木下さんに秀吉は大声で・・・」

秀 「姉上はちっさな男のk「秀吉ちよつとこつち来ようか？」なんじゃ姉上？」

秀吉は木下さんに引きずられ廊下に

秀 『なんじゃ姉上無言でワシの手を取って？・・・あ、姉上！ワシの腕はそっ

ちに曲がらなああああ!!』

しばらくして木下さんが戻って来た・・・赤い液体を頬に付けて

優 「ごめんなさい秀吉急用で帰っちゃったから代わりの人出てきてくれないかしら

？」

雄 「いや、俺達の不戦s y「いえ、雄二私に行かして」ノワール？」

「そう言つてノワールは前になる」

優 「あら、貴女が相手？」

ノ 「ええ、相手にとって不足は無いでしょ？」

89 この作品ネタバレ要素少ない気がする!? by ファニアちゃん
今更 by 坂本雄二のお嫁さん霧島翔子 おいこら!! by 赤ゴリラ

.....

優 「ええ、全力で行かして貰うわ!!」
こうしてAクラス戦の火蓋が切って落とされた。

ナンテコツタイ＼（ \hat{o} ）／b y. 明久 いや！どう
した！明久!?! b y. 雄二 明久が壊れたく!!! b y. ネ
プテユーヌ もうどくにもなくれく♪b y. ファニ
アちゃん

Aクラス戦 優子VSノワール

高「科目はどうしますか？」

優「数学でお願いします!!」

木下さんがそう答えた。

雄「なっ!?!勝手に決m...「構わないわ」はあ!?!」

雄二の反論にノワールが言葉を重ねて木下さんの申し出を承諾した。

ノ「大丈夫よ雄二、それに相手に選ばした方がいいんでしょ？」

雄「む...確かにそうだな...まあいい!とりあえず自分から秀吉の代わりになった
んだから出来るだけ勝手くれよ!!」

ノ「当たり前よ!」

ネ「頑張つてね!ノワール? (???)?」

ノ「はいはい」

優「話は終わったかしら?」

ノ「ええ、ごめんなさい待たせちゃったかしら?」

優「別に構わないわ、でも、早く始めましょ?」

ノ「そうね」

高「では、両者召喚獣を召喚して下さい」

優「はい」

ノ「わかりました」

高橋先生の質問により、2人は召喚獣を召喚した。

優・ノ「試獣召喚(サモン)!!」

2人の呼びかけにより召喚獣が召喚された。

科目ー 数学 ー

Aクラス 木下優子 497点

木下さんの召喚獣はフルアーマーの甲冑を着て大きいランスと盾を持つてる。まさに西洋の騎士って感じの装備だ。そして…

雄「何だと！400点越えだど!?」

明「秀吉、木下さんってあんなに頭良かったの？」

僕は秀吉に聞いた（怪我の方は明久が治しました）

秀「う、うむ：： 頭はいい方じゃがワシもあそこまで高い点数が取れるとは知らなかった：：」

明「ということとは恐らく：：」

僕はそう言つてベールの方を見ると：：

ベ「ニヤリ：：」

やっぱりベールが教えたか：：

ノ「へー、400点越えでしかももう少して500点じゃない」

優「どうかしら？あなた達でもコレはキツイのじゃないかしら？」

そう言つて笑う優子さんにノワールは：：

ノ「ええ、驚いたわ：：でも」

優「え？」

ノワールは少し溜めて言つた!!

ノ「上には上がいることを教えてあげる!!」

Fクラス ノワール・ラストেশヨン 702点

F・A 「二はああああああああああ
!!!????」

ノワールの点数を見て皆が叫んだ。

優 「な、700点越え…?」

ノ 「ふふ、驚いたかしら?」

優 「驚くに決まってるでしょ!!… なんなのよその点数…」

ノ 「ごめんなさいね、私の仕事の関係上計算は得意なの」

そう、ノワールは女神の仕事で計算などは得意なのだ。

ノ 「さあ始めましょう! 私たちの戦いを!!」

優 「いいわ! 別に勝てないわけじゃないもの!! やってやろうじゃないの!!」

高 「では、2人とも始めてください!」

こうして、Aクラスとの戦いの火蓋が切つて落とされた!!

明 「次いでに言うとなワールの服装はアニメ版のノワールの服だよ!」

ネ 「ネプツ! ソレ! 私のセリフ!」

秀 「お主らは一体誰に言っておるのじゃ?」

ていうか明久、火蓋なんて言葉知ってたんだ!? 驚き…
b y. ファニアちゃん

殴るよ?

優・ノ「はあああ!!」ギンツ

お互いの剣とランスがぶつかり合う

優「くっ、はあ！」

木下さんがランス：・横払いをし ノワールはそれを避けた。

ノ「なかなかやるわね！」

優「そう言つて貰えると嬉しい：・わ！」

木下さんはランスでの突きの猛攻にでた。

ノ「ふっ！はっ！やあ!!」

ノワールはその猛攻を避け木下さんに一撃入れる

優「しまっ！くう！」

なんとか避けた木下さんだったが攻撃がカスった。

A クラス 木下優子 362点

優 「っ!カスただけでこんなに!」

ノ 「どうしたのかしら?貴女の実力はそんなんはもんなの?」

優 「くっ!... 勿体ぶってる場合じゃ無いわね...」

ノ 「!!(雰囲気が変わった)」

木下さんは腕を掲げると...:

優 「腕輪発動!!」

木下さんがそう言った瞬間、召喚獣の身体が光だした。

光が収まった瞬間木下さんの服装が黒い外装にマントが着いて腰に黒い剣のを下げ
ていて、黒い模様が付いた旗を掲げていた。そして目が黄色になり髪も白くなり肌も少
し白くなっている。

優 「どうかしら?コレが私の腕輪、黒化よ」

ノ 「ええ、驚いたわ... でもいいのかしら?そんなに武装を薄くして防御力が下がっ
てるわよ?」

優 「その分起動性が上がるから問題ないわ」

Aクラス 木下優子 312点 黒

木下さんはノワールに近付くと手に持った旗で攻撃した。

明 「腰の剣じゃなくて旗で攻撃!」

優 「剣なんてサブ武器よ!!」

明 「ナンテコツタイ＼(´o´)／」

ノ 「面白いじゃない!!」

ノワールはそう言つて木下さんに攻撃を仕掛けた!

ノ 「レイシーズd...」

優 「ふふっ」

ノ 「!?」

ノワールは木下さんの様子が変わると気付き後ろに飛んだ。

ゴオ!!!

するとノワールが居た場所に黒い焰が立った。

ノ 「っ!コレは!？」

優 「ふふふ、私の腕輪が見た目が変わるだけだと思つたのかしら?」

木下さんはそう言つて手に黒い焰を出した。

ノ 「なるほど、ソレが本当の能力つて事ね?...でも、それだけじゃないんでしょ?」

優 「あら?気付いちやつた?」フツ

ノ 「?...っ!!!」バツ!

木下さんが腕を掲げると、ノワール召喚獣の後ろに剣や槍などの武器が何処からとも

なく現れてノワールは幾らか当たってしまった。

Fクラス ノワール・ラストイション 598点

ノ「ちよつと出鱈目過ぎる気がするわね…」

優「さあ、まだまだ行くわよ!!」

木下さんの猛攻が続く…

ノ「…はあはあ」

優「ふふふ」

Aクラス 木下優子 228点

Fクラス ノワール・ラストイション 198点

勝負は木下さんが押していた。

優「どうかしら?そろそろ諦めたら?」

ノ「誰が…はあはあ」

優「もう満身創痍じゃない」

この勝負はこの場にいるほとんどの人が見ても勝敗は決していた…そう、ほとんどが…だ。だが僕にネプテューヌ、ブランとベールは違った。そしてノワールは…

ノ「ふふ、あはははは!!」

優 「あら？勝てないと気付いて狂っちゃったかしら？」

ノ 「いいえ、予想以上に貴女が強くて笑えちゃって… それに忘れてないかしら？」

優 「？何を？」

ノ 「私はまだ腕輪を使っていないってことによ!!」

優 「っ!!？」

ノ 「まさかべールたち以外に使う羽目になるなんてね…」

優 「何を言ってるの？」

ノ 「見なさい！コレが私の本当の力!!」

そう言つてノワールは腕を掲げた。

ノ 「腕輪発動！女神化!!」

ノワールの召喚獣の姿が光だし髪が黒から白くなりツインテールからロングになり目が赤から青になってシユアクリスタルの模様が浮かんで、黒い服になって機械のようなものを纏っていた。

Fクラス ノワール・ラストেশヨン 148点 女神

ノ 「女神の本当の力、見せてあげるわ!!」

優 「へえ、貴女も変身型の腕輪なのね？… それに私と同じ黒服に白髪なんて、奇遇ね？」

ノ「ええ、そうね…。それと今の状態は女神ブラックハートよ」

優「あら、女神なんて痛々しいわね?」

ノ「貴女の黒化も似たようなものでしょ?」

優「いうじやない…。そっちにも何か有るのでしょ?」

ノ「教えると思う?」

優「じゃあ、出さしてあげる!!」

そう言つてノワールの足元から武器を出した。

ノ「っ!はあ!!」

ノワールはそれを避けてその中から一つ武器を取り木下さんに投げた。

優「危ないわね!?」バツ!

((アンタの方が危ないよ!)) b y. この場の全員の心の声+ファニアちゃん

優「って!召喚獣は何処に!」

木下さんが周りを見渡し気付いた。

優「!?上っ!!」

そう言つて上を見上げるとノワールの召喚獣が降下していた。

そして木下さんの召喚獣もノワールに剣を突き立てる!!

優・ノ「はあああああああああああ!!!」

両者が交差した。

科目― 数学 ―

Aクラス 木下優子 47点 黒

Fクラス ノワール・ラステイション 51点 女神

優・ノ「: : はあはあ」

お互い満身創痍になり、息が上がっている。

ノ「: : 次で終わりにしない？」

優「: : ええ、そうね」

どうやら、次で決着を付けるようだ。

お互いの渾身の一撃を放った!!

優「コレは、憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮: :」

ノ「ラステイションの女神の剣技！見せてあげるわ!!」

優「吼え立てよ、我が噴怒（ラ・グロンドメイト・デュ・ヘイン）!!」

ノ「インフィニットスラッシュ!!」

木下さんは、腰の剣を掲げて周りに黒い焰を出してからの大量の武器を地面から出している。対するノワールは、素早い連撃を決めて、最後に虹色の斬撃を木下さんに放った!!

互いの攻撃がぶつかり合い爆破が起き召喚フィールドの中が煙で見えなくなった…
雄二「うお!!勝敗はどうなった!?!」

そして煙がはれると…

科目ー 数学 ー

Aクラス 木下優子 0点

Fクラス ノワール・ラストেশヨン 3点

高「しよ、勝者!Fクラス めワール・ラストেশヨン!!」

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

第1回戦はFクラスの勝敗と化した…

変身中の攻撃はご法度だよ!!!
byネプテューヌ

あ、今回の変身ゼリフそれじゃないから
by明久

ネプ!?! by再びネプ子
明久そこは黙って上げなさい

よbyノワール

優「あく敗けたわ、強いからねラストイションさん」

木下さんはそう言ってノワールに手を差し出す。

ノ「いえ、貴女も強かったわ木下さん」

ノワールもそう言って木下さんの手をとる

優「そんな事無いわよ…… 実際腕輪を最初から使われてたら敗けてただろうし……」

ノ「あら? そんなもの事は考えちゃダメよ? 終わった事は終わったと受け止めな
きゃ」

そう言うノワールもよくそんな事考えてる気が……

ノ「明久うるさいわよ!」

明 「ウソ!? 声に出てた!？」

ネ 「ノワールも… って辺りから声に出てたよ?」

明 「殆ど最初からじゃないか!」

チクセウ:・

ノ 「さて、木下さん? そろそろ次の人に変わりましょ?」

優 「ええ、そうね:・ あと、私の事は優子で良いわ」

ノ 「じゃあ、私の事はノワールって呼んで頂戴ね優子」

優 「勿論よ! ノワール! 次は勝つから!」

ノ 「残念、次も私が勝つわ!!」

そう言つて2人とも満足気に自分のクラスに戻つて行つた。

ノ 「で? 雄二、これでいいかしら?」

雄 「ああ! 問題ねえ!! 良くやったノワール!!」

ノ 「それじゃ、次は誰を出すの?」

雄 「ん? 次はそうだな:・: すまない島田行つてくれないか?」

次は島田さんか:・:

島 「え? 私?」

雄 「ああ、ただし科目選択はするな!」

島「なっ！ソレって敗けて来いってこと!？」

この反応は当たり前前だ負けろと言ってるようなものだもん

雄「本当にスマン！だがFクラスが勝つにはこれしかないんだ!!!」

島「で、でも：：私じゃ無くて他にも居るでしょ？」

雄「いや！お前だから頼んでる！」

雄二が頭下げてる：：そこまで本気ということか：：だったら

明「島田さん：：いや、美波！僕からもお願い！」

島「よ、吉井まで：：わかったわよ！やればいいんでしょやれば!!!」

雄「助かる」

ネ「ちくわ大明神」

ノ「アンタのせいでの雰囲気台無しよ：：」

ネ「仕方ないね」(へー、)「私シリアスブレイカーだから!!!d(へ、▽、*)」

ネプテューヌさんナイスデス!!d(へ、▽、*)私もシリアスは嫌いデス!! b y フア

ニアちゃん

高「話は着きましたか？では、両者前へ！」

佐「貴女が私の相手ですか？私は佐藤美穂と言います」

佐藤美穂さんか：：確か得意科目は物理だったかな？

島「島田美波よ」

佐「確かあなたは数学が得意でしたね？数学を選んでもいいんですよ？」

島「いえ、科目は貴女に譲るわ！」

佐「いいのですか？それだと貴女……負けますよ？」

島「敗けるつもりは無いから来なさい！」

佐「良いでしょう……では物理でお願いします！」

高「両者召喚してください！」

島・佐「試験召喚（サモン）」

科目ー 物理ー

Fクラス 島田美波 61点

Aクラス 佐藤美穂 399点

佐藤さんの召喚獣は少し太めの剣を持った軽装の装備だ。

佐「では……さよなら」

そう言つて佐藤さんの召喚獣は素早い動きで島田さんを切つた

島「うっ！」

Fクラス 島田美波 0点

Aクラス 佐藤美穂 294点

佐「な!?!何で点数が!!」

島「アンタの召喚獣が通った瞬間首に一撃入れさして貫ったわ:~:」

そう島田さんはさっきの一瞬で召喚獣の首をレイピアで突いたが少しズレてしまったため止めには至らなかった。

佐「:~:なるほど、なかなかやりますね島田さん」

島「結局負けちゃったけどね?」

佐「そんなに自分を責めないで下さい:~:私自身1点も削るつもりも無かったのに100点以上削られて悔しいんですよ?」

佐藤さんは苦笑いでそう言つて

島「ソレは良かった」

島田さんは笑顔で返した

佐「でも、次はこうは行きませんから」

島「いいえ、次は私が勝つわ!」

佐「楽しみにしています」

お互い戦線布告をしてクラスに戻った。

島「ごめんやっぱり負けちゃった:~:」

明「そんな事無いって凄いやAクラス相手に100点も削るなんて!!」

雄 「ああ! 良くやってくれた島田!!」

姫 「美波ちゃんすごいです!」

ノ 「なかなかやるじゃない!」

ネ 「カツコよかったよ!」

秀 「うむ凄かったぞ!」

康 「… 凄かった」

島 「吉井… みんな… ありがとう!」

雄 「よしっ! じゃあ次はそうだな… ネプテューヌ頼む!」

ネ 「任された!」(… ω…)

次はネプテューヌか… さて相手は…

ブ 「私が出るわ」

相手はブランか… こりやネプテューヌも厳しいかも

ネ 「あっ! 科目は現国でお願いします!」

ちなみに現国にした意味は特にありません!! b y ファニアちゃん

高 「では、初めて下さい!」

ネ・ブ 「試獣召喚(サモン)」

科目ー現国ー

Fクラス ネプテューヌ・プラネテューヌ 549点

Aクラス ブラン・ルウイー 628点

雄「いやっ！だから点数可笑しいだろ!!」

雄二はスルーする事にしよう

そして二人の服装は…

明「うん、やっぱりアニメ版の服だ」

ノ「明久メタいわよ?」

明「仕方ないさ、家のフアニアはアニメを好むからね」

ノ「はいはいわかったからメタ発言はほどほどにね?」

明「はくい」

秀「じゃからお主らは何を言っておるんじや…」

ネ「それじゃ早速始めよ! ブラン!!」

ブ「ええ、始めましょう」

そう言つて2人は攻撃を繰り出す!

ネ「クロスコンビネーション！」

ブ「テンツェリントロンペ!!」

そうやって何度か武器のぶつかりあいや鏝迫り合いを繰り返した後に

ブランが呟いた。

科目ー現国ー

Fクラス ネプテューヌ・プラネテューヌ 421点

Aクラス ブラン・ルウイー 474点

ブ「そろそろ操作にも慣れたしお互い本気で行きましょ?」

ネ「え!? ブラン本気じゃなかったの!? 私結構本気だったんだけど!!」Σ(・ω・ノ)ノ

ブ「いえ、本気だったわ…。でもソレはこの状態での本気…。ここまで言えば分かる

?」

ブランがそう聞くとネプテューヌは息を吸い込み思いつきり言い放った。

ネ「わかんない!!!」(??、*)

ズコツ みんなが転けた。

何故かネプテューヌは胸を反らしてドヤ顔で言いのけた。

ブ「わかんないってどういう事？」ぷるぷる
あつブラン怒ってる…

ネ「ブラン怒らない怒らない♪」

ピキツ あつヤバイ

ブ「べ、別に…お、怒ってなんか、い…」ぴくぴく

ネ「もく♪そんな事言つてく♪流石【無印の真のツンデレ】さんだよ♪」

ブチツ あつ\（^ω^）/オワタ

ブ「てめえ！ネプテューヌさつきから聞いてりやあ!!好き勝手言つてんじやねえ!!大
体誰がツンデレだ!!ツンデレになった覚えはねえよ!!!」

優「え？アレがルウィーさん？私の知ってるルウィーさんは物静かで読書好きな人な
んだけど？あんな荒い口調に顔に黒い影がささってる人じゃないんだけど!？」

ベ「ああ、気にしないでくださいブランは怒るとああなるだけで普段は優しい子です
から」

優「と言う事はあれが本性とかでわなの？」

ベ「ええ、ブランの荒い口調はただの照れ隠しですから…つとそろそろ始まります
よ」

優「え？何が？」

べ「女神同士の戦いですわよ」

ネ「それじゃあ、行くよ！活目せよ…なくんてね♪」

ブ「…ブチ切れた…徹底的にぶちのめす!!」

ネ・ブ「腕輪発動!!女神化!!」

優「なつ！ルウィーさんとプラネテューヌさん達もあの腕輪を!!」

科目ー現国ー

Fクラス ネプテューヌ・プラネテューヌ 372点 女神

Aクラス ブラン・ルウィー 424点

パ「変身完了！プラネテューヌの女神の力見せてあげるわ!!」

ホ「装着…完了、覚悟しやがれ！ネプテューヌ!!」

相変わらずネプテューヌは女神化すると口調変わるな

雄「おい、明久！なんかネプテューヌのやつ雰囲気が変わったんだが…」

明「えっ!?ああ、ネプテューヌはあの腕輪を使うとなんかあんな口調になるんだよ（流

石に本当に女神化出来ることは言わない方が良いよね?）」

雄「そ、そうか」

ネ「さて、ブラン、コレでいいかしら？」

ブ「ああ、ここからはお互い全力で行くぞ!!」

ネ「ええ!!」

戦闘シーンは飛ばして最終決着

明「ええ!?!なんで!!」

戦闘シーンってどう書けばいいかわかんない!! b y ファニアちゃん

明「いや、前回書いてたよね!」

アレはその場のノリデス d (、▽、*) まあ、書いて欲しいって感想であつたら書くけどさあ?

明「露骨な感想勧誘を…」

大丈夫!書いてくれる人居ないから戦闘シーン飛ばすデス! d (、▽、*)
明「(ノムー、)はあ」

そして決着へ

科目ー現国ー

Fクラス ネプテューヌ・プラネテューヌ 127点

Aクラス ブラン・ルウイー 183点

ネ「次で終わりにしましょう…」

ブ「ああ、そうだな…」

そう言つて2人は構えて

ネ「ネプテューヌブレイク!!」

ブ「ハードブレイク!!」

ネプテューヌの激しい連撃とブランの斧による打撃がぶつかり合う…

明「て、点数は…」

Fクラス ネプテューヌ・プラネテューヌ 0点

くっ!ネプテューヌの負けか…

Aクラス ブラン・ルウイー 0点

明「え?」

高「両者点数が0点によりこの勝負引き分け!!」

予想外の決着だった…

僕はまだ2段回変身を残しているよ!! b y明久 1つは女がm... ムグツ!? それ以上は設定読んでない人にバレルからアウトだよ!! b yノワールとその口を塞いでるネプテユーヌ もう遅いと思うわ b yブラン

前回のあらすじ

明久3行でよろ!

明「えく、しょうがないなあえーと...」

『美波、敗北したけどいい戦いだった』

『ネプテユーヌ、ブランを怒らせる』

『ネプテユーヌら引き分けた』

はい、コレでいい?」

OKダヨd (・▽・)。

ネ「それじゃあ今回こそ本編どうぞ(〓 ・ω・)っ」

某Aクラス

明「え？コレってどうなの？」

ノ「さ、さあ？そのままの意味で引き分けじやないかしら？」

高「はい、先程も言いましたが引き分けです」

雄「その場合、もし勝敗が同数になればどうなるんだ？」

高「その場合はもう1人ずつ代表を出して勝ち負けを決めてもらいます」

雄「そうなると……ちっ！戦力に変更が必要か」

そっか、こつちの戦力を残さないと最後に負けたら元も子もないしね

ネ「えーと……ごめんちやいテヘペロ（？>？<？）♪」

雄「はあ、まあいい！今更起こったことをどうこう言っても仕方ない！！とりあえず何とかあと4勝出来れば最高なんだが……まあ、そうも言ってもらえんか、仕方ない！！次に移行するぞ！」

雄二の言葉に高橋先生も頷き呼びかけてきた

高「では、次の方々よろしく願います」

ネ「あれ? 私とブランの戦いのあとの会話は?」

ブ「今更私たちが会話したところで大体のオチが読めてるから仕方がないからじゃないかしら?」

ネ「ねぷう!? 私たちの扱い酷くない!?!」

ドンマイ(´・▽・´)ノ b y ファニアちゃん

雄「次はそうだな... ムツツリーニ頼むぞ!!」

ム「... 了解した」コクリ

次はムツツリーニか... 保健体育なら負けないと思うけどどうなるか...

優「次は土屋君ね...」

雄「なんだ? 怖気付いたか?」

優 「いいえ… それにAクラスにだって保健体育が得意な子だって居るわよ？」
雄 「なに!？」

コレは驚きだ… Aクラスはそういうの苦手な人ばかりと思っただけでもないか…

優 「ふふん、保健体育が得意なのがそつちの特権だと思っただけ間違えよ!!」

雄 「ム、ムツツリーニ?大丈夫か？」

ム 「… フツ、問題ない」

? 「へえ、君がムツツリーニ君かあ」

ムツツリーニが雄二の問いに余裕で答えてると、Aクラスから緑色の髪をした人が現れた。

雄 「誰だ？」

愛 「あ、どもどもく2年Aクラス所属の工藤愛子だよよろしく♪」

優 「工藤さんこそさつき説明した保健体育が得意な子よ!!」

愛 「もく優子、私のことは愛子って呼んでって言ったじゃん!!」

え?そこ?

優 「いや、今はそんな事言ってる場合じゃないでしょう!工d… 「ん?」愛子」

愛 「うんうん、それでよし!!」

ネ「今、なんかすっごい殺気感じたんだけど!?!」

明「い、いや流石に気のせいだよ!!... 気のせいだよな?」

ノ「気のせいだと信じたいわ... ねえプランいつもあんな殺気出せる子なのあの子?」

ブ「いえ、もつと明るい子よ、あんな表情初めて見たわ」

ベ「(流石のわたくしにもあの殺気は恐怖を感じましたわ)」

ム「..... 科目は保健体育で」

僕たちが小声で話している間にも科目が決まったようだ... :

愛「さて、ムツツリーニ君は保健体育が得意みたいだけど... さつき優子が言ってた

とおりボクだって保健体育は得意なんだ〜♪しかも君と違って... 実技で、ね♪」

ム「... フツ、甘いぞ工藤愛子」

愛「え?」

ム「... 実技だけで、点数が取れると思うな... ! 保健体育は実技だけではない!!」

す、凄いななんて気迫だ!!... でもさ、ムツツリーニ?

ム「.....」ドクドク

鼻血を大量に垂らしながら言っても説得力ないよ?

愛「あはは!! やっぱ面白いねムツツリーニ君♪」

高「あの、そろそろ始めてもらっていいでしょうか？」

愛「はい。試獣^{サモモン}召喚^ンつと」

ム「……………試獣^{サモモン}召喚^ン」

「な、なんだ！あのバカデカイ斧は!?」

確かにデカイアレが当たれば流石のムツツリーニも…

愛「それじゃあバイバイムツツリーニ君♪」

ム「……………加速」

愛「え？ツ!!？」

ム「……………加速、終了…!?」ガキイ!!

愛「あ、危なかったあ…」

科目ー保健体育ー

Fクラス 土屋康太 572点

Aクラス 工藤愛子 572点

明「なっ?!ムツツリーニと同点!？」

雄「いや、ムツツリーニは腕輪を使っているからその分の点数は引かれているはず

だ…だからムツツリーニの方が点数自体は上だったようだが…止められたか」

それでも、あれだけの点数ちよつとやそつとで取れはしない

愛「いや、今のは結構危なかったよ、斧を何とか盾に出来て良かったよ!」

ム「…………… くっ!! 仕留めきれなかった!!」

愛「それじゃあムツツリーニ君も腕輪見せてくれたしボクも見せちやおっかな!! 腕輪発動!!」

工藤さんがそう言うのと工藤さんの召喚獣の身体が光りだした。…そして光が収まると…

なんか赤と黒の外装を着てちよつと髪の色素が薄くなつて髪を後にまとめて黒と白の双剣を持つている姿が出てきた…ただ

愛「ふっふーん、どお? 私の変身後の姿は?」

ム「…………… !!?!!」ブツ!!

へソなどが色々出てる露出多めなせいでムツツリーニが!!

明「ムツツリーニ!!」

ム「…………… 寄るな明久!!」

明「!?…………… ムツツリーニ」

ム「…………… コレは俺の戦いだ!!」ハアハア

ムツツリーニ…………… カッコイイ事言ってるつもりかもしれないけど鼻血で水溜り作りながら言つてらカッコ良さ半減だよ……………

ていうかまた変身系の腕輪？

仕方ない私がそういうの好きだから仕方ないb y ファニアちゃん

後で書きずらくなっても知らないよ？ b y 明久

大丈夫デスよ♪ b y ファニアちゃん

はあ… 不安だ… b y 明久

愛「あーら、ムツツリーニくん♪どうしたのかしらあ？まさか私の召喚獣で興奮しちゃったかしら？」

ム「… し、知らない」

愛「フフツじゃあ… こうして… 「そろそろ続きを行ってもらっていいですか？」

あっはい」

高橋先生に注意されて素直に従う工藤さん

愛「さて、流石に長くなっちゃったしサツサと終わらせましょうか？ムツツリーニくん？」

ム「… こくり」

そして2人は距離を取り…

愛「山を抜き、水を割り、尚落ちる事なきその両翼…」

ム「… 加速!!」

「そう言つて工藤さんは剣をほおり投げて... って武器を捨てた!?... と、よく見てみたらいつの間にかまた剣を持つているし... そしてムツツリーニはそのまま加速して... !? ムツツリーニの周りにさっき投げた剣が!! しかも増えてる!!?」

愛「鶴翼三連!!」

ム「..... !? 加速!!」

さらに、工藤さんはムツツリーニの真後ろにいきなり出てきて... もうわけがわからないよ... ただムツツリーニももう一度腕輪を使ってその陣營をくぐり抜けて...

愛「避けられ!? でもコレで!!」

ム「..... 甘い!! 加速!!!」

工藤さんが剣を薙ぎ払つてムツツリーニに攻撃しようとしたけどムツツリーニの腕輪でソレよりも早く攻撃を入れられて.....

科目ー 保健体育 ー

Fクラス 土屋康太 306点

Aクラス 工藤愛子 0点

ム「..... ちよつとカスつた」

「どうやらムツツリーニもダメージ受けたらしい

愛「そんな... ボクが負けるなんて」

ム「…………… 工藤愛子」

愛「なにさ、負けたボクを笑いにきたの？」

ム「…………… えっと…………… いい戦いだった」

愛「え？」

ム「……………」スタスタ

そう言つてムツツリーニはFクラス側に戻つてきた。

愛「ムツツリーニ君!!」

ム「……………」ピタッ

愛「次は…………… 負けないから!!」

ム「…………… フツ…………… 次も俺が勝つ」

そう言つた2人はいい笑顔だった……………

おしまい

125 僕はまだ2段階変身を残しているよ!! b y 明久 1つは女がm... ムグッ!? それ設定読んでない人にバレるからアウトだよ!! b y ノワールとその口を塞いでるネプテユもう遅いと思うわ b y ブラン

終わらせないよ!! b y 明久 & ゲーム業界組

えー、もう今回コレでいいじゃん!! b y ファニアちゃん

明「いや、駄目だから今までサボった分描いてもらうから!!」

ネ「そうそう! まだまだ行けるよー」

ノ「終わらない限り眠れると思わない事ね」

ブ「大丈夫3徹よりは楽なはず」

ベ「経験者が語ると誓いますわね」

で、でもお...

明 & ゲーム業界組「ああ?」

わかりました!! 書くから! 描きますから!!

では続きをどうぞ (;)

明 「ムツツリーニお疲れさm…「プシヤアアアア」ムツツリイイニ!!」
鼻血を大量に放出してる!?

雄 「どうやらさつきまで耐えていたものが一気に来たようだな…しかし良くやった
ムツツリーニ!!安らかに眠れ」

明 「まだ死んでないよ!」

雄 「さて、次は明久に行ってもらうか…」

明 「よし任せて」

「なんだ?吉井って強いのか?こんな負けられない戦いで出すということは…」
「いや、流石にないだろ?」

明 「みんな酷くない!?僕なら勝てるから行かせるんだよね!雄二!」

雄二 しんじてるからな!!

雄 「おう、逝ってこい」

明 「うん…ってあれ?何か漢字が違うような?」

雄 「気のせいだ、サツサと逝ってこい」

明 「う、うんじゃあ行ってくるよ」

なんか腑に落ちないけど行くか

雄（まあ、明久では勝てんだろうだがな）ニヤ

秀（相変わらず悪こと考えてる顔しているのお）

優「ふーん、次は観察処分者で有名な吉井君ね... さて、誰に行つて「わたくしが行きますわ」ベールさん? でも...」

ベ「心配しなくても大丈夫ですわ」

優「いえ、そうじゃなくて貴女はAクラスの切り札みたいな者よ? ここで消費するのは「優子さん」... わかったわ」

ベ「すみません、それに明久の相手はわたくしかブランもしくはノワールやネプテユー又ぐらいしか相手にならない可能性があるので」

優「え?」

ベ「それでは行つて参ります」

優「どういうこと?」

明「あ、ボールが相手かあ」

こりやあ一筋縄では行かないなあ

ベ「ええ、よろしくお願ひしますわ明久」

「おい！吉井！！リーンボックスさんと親しげにしているが、知り合いなのか！！」

明「え？あ、えーと。：「わたくしは今明久の家に住まっていますので」ちよつとベールさん！！」

そんな事言うとは

「「「な、なんだとオオオオオオオオオオ！！！！」」」

美「ど言うことよ！アキ！！」

姫「そうです！！どういうことですか吉井君！！？」

ほら！こうなる！！

明「いや、だからコレは「あ、ブランもいっしょですよ？」「ちよつと私まで巻き込まないで！！」ベエエエルウウウウ！！！！」

「「「今から異端審問会を開始する」」」

明「ちよつとおお！？収集つかなくなつたんですけどお！？」

鉄「貴様らあ！！いい加減しろお！！」

鉄人の叫びでやつと収まつた。．．．あんた最高の教師だよ！！

「「「.....」」」シーン

鉄「はあ... やつと静かになったか... お前らサツサと初めてくれ」

明「助かったよ鉄じn...」そんなに補習を受けたいか? 吉井?」西村先生!!」

生徒を脅すなんてなんて最悪な教師なんだ!?

ベ「それでは科目は科学でお願いします」

明「いいの? ベール? ここで選ぶともうAクラスは科目選べないけど?... それに」

ベ「別に大丈夫ですわ、許可を貰ってますし... 本気の明久と戦いたいですし」

明「そっかー、じゃあこっちも手加減しないからね!!」

「どういうことだ? 吉井は科学が得意なのか?」

「さあ? 今まで科学で吉井の召喚獣見たことないし... そのところどうなんだ? 坂本

?」

雄「いや、俺も明久が科学が得意とは聞いたことがない」

「そうだよな」

雄（しかし、なんなんだ明久のあの自身あるあの顔は...）

ノ「まあ、そうよね普通はこんな反応よね」

ネ「明久はあの時から機械好きになったから知らないのも無理もないよ?」

ブ「確かにそうね」

秀「？（何の話じやろうか？）」

ベ「それじやあ始めましょうか」

明「うん」

高「それではFクラスV S Aクラス第5回戦初めてください」

明&ベ「サ試獣モ召喚!!」

そう宣言すると僕とベールの召喚獣が召喚されて：：て？あれ？

明「僕の召喚獣の服装が変わってる？」

ネ「あれ？それってあっちに居た時の服装じゃん」

明「あ、本当だ」

ノ「しかもベールのはやつぱりアニメの服ね」

ブ「メタいわよノワール」

131 僕はまだ2段階変身を残しているよ!! b y 明久 1つは女がm... ムグッ!? それ設定読んでない人にバレるからアウトだよ!! b y ノワールとその口を塞いでるネプテユもう遅いと思うわ b y ブラン

秀「じゃからおんしらは... e t c」

ベ「そっちの服装も久しぶりな気がしますわね？」

明「うん、最近着る機会が無かったからね〜」

ベ「では、折角そっちの服装ですし？ね？」

明「え？ちよつとベール... さん？」

え？なんで滲み寄ってくるの？

ベ「ウフフフフ」

明「ちよつ!? やめ... ってネプテユース、ノワール、ブラン!!? なんで僕の腕を抑えて!!?」

放して!! 何が起こるか予想出来るから逃げたいんだけど!?

ネ「いやー、私も久しぶりにアツチの明久が見たいというか... ね？」

明「ね? じゃないよ!!? 流星に人目が多いから勘弁してー!!」

ノ「まあいいじゃない明久どうせいつかバレるんだから」

明「ソレ今じゃなくていいじゃん!!」

ブ「諦めなさい明久、ああなったベールは誰にも止められないわ」

明「諦めたら駄目だよブラン!! 諦めたら試合終了っていう名言もあるんだから!!」
ベ「さあ… 明久観念してください♪」

明「やめっ… ヤメロオー!」

そう言えば雄二達はというと…

雄「何やってんだアイツら」

秀「さあのお? ワシにもわからん」

ム「… きになる」

そうやってコチラを見つめてた

明「いや!? 助けてよ!!」

ベ「はい、ポチツとな」ポチツ

そう言つてベールは僕の脳波コントローラと呼ばれる髪飾りの真ん中を押した。

ピカー

そして僕の身体が光に包まれた。

ゲーム業界組以外「**「メガア!メガア!!!」**」

あまりの眩しさに目を抑えていた(ちなみにネプテューヌ達はどこからか出したサン
グラスで難を逃れていた)そして僕わと言うと…

明「アイツ→タイ←メガアアア ? ?」

自分でその光を浴びて目が痛くなった

s i d e o u t 明久

s i d e 雄二

雄 「つく！なんだ!?!いきなり明久の身体が光ったと思ったら光に目をやられたぞ!?!」

ちっ！目が痛てえ

秀 「うう、眩しかったのじゃ...」

ム 「..... フラツシユ以上の光だった」

姫 「まだ目がチカチカしますう」

美 「なんなのよ一体...」

どうやらムツツリーニや秀吉達も無事なようだ

雄 「そうだ！戦いはどうなった!?!」

? 「大丈夫ですよ坂本さんまだ戦っていません」

雄 「おう、そうk... って誰だ？今の？」

俺が声の方に目を向けると茶髪で髪を腰辺りまで伸ばした女子生徒が居た。

？「ああ、すみません！こつちでは初めてでしたね!!」

雄「こつちでは？どういうことだ？」

？「えつとですね…」「わーい!!アキギアだー!!」きやつ!!お姉ちゃん!!」

「「お姉ちゃん?」」

お姉ちゃんだ?!?ネプテューヌに妹が居たのか!!

ア「あつ、すみません!では改めて自己紹介を… 私の名前はアキギア・プラネテューヌと申します。よろしくお願いします」

そう言えどもことなく似ているな… 性格は真逆のようだが

ネ「アキギアはねく私の自慢の妹の1人なんだよ」(。>ω(・ω・。ゝ)ぎゅく
秀「そうであったか… とうか何故今その妹が居るのじゃ? 明久も居らんよう
じゃし…」

確かにそうだ明久の姿が見当たらんねえどこいつたんだアイツ…

ネ「え? 何言ってるの? 明久ならここに居るよ?」

「「は?」」

何言ってるんだこいつ?

雄「いやいや、だってそこにはネプテューヌの妹とノワール達しかいないじゃない

ネ「次回に続く!!」
何故だアー!!!?
ちゃんちゃん♪